

Origami Tanteidan Newsletter

折紙探偵団新聞

54号

折紙探偵団新聞
最終号

第六回 「空間作品」(その2)

<唐突ですが>

今回は冒頭から恐縮だが、筆者による「空間的表現」の実践例として、いきなり手前味噌シリーズ第四弾「空間如来」を見ていただきたい。光背は蛇腹折りを自然にひろげただけ。点支持による蓮台の下空間。蓮弁の間隔。用紙の重なりを、空気を含んだ形のまますケルトンの的に解放し、「伝承の風船のような包まれた領域」になる



べく生じない風通しのよい構成にする。という全体方針に気付いていただけるだろうか(人物部分本体はまだまだ納得のいくものではないので、できれば見なかったことにしてほしい)。どの方向から見てもかならず、少なくともひとつ、見えないパーツがあるというふうに、それぞれの方向からでないと捉えられないイメージを配置してみた(平面図ではわかるわけないのだが…光背の裏側の処理も気に入っている)。

<空間作品の実利的側面>

そもそも筆者が空間作品という方法に至ったのは、いかにして「視覚的情報量」の多いデザインを折紙作品として成立させるか、という発想が根底にあったからかもしれない。折り紙では、ちょっとした手の込んだものをつくろうとすると、余計な線が加速度的に増加する。「構成線ひとつひとつの強すぎる印象」という障壁が、折り紙という方法には常につきまとう。

積み重なった情報量を引き出して三次元的に解放する「空間的表現」は、こうした大量の情報扱い方に対する筆者なりの解答であり、平面に収まりきれない情報量でもすっきりとまとめあげることができると思う。

さらに、工程数の多い作品に必然であるはずの問題、「内部に無駄にしまい込まれてしまう面積が多くてもったいない」ということに対しても、「空間的表現」は或る程度の活路をひらくのではないだろうか。空間作品では、用紙の面積のうちの多くが作品表面に露出して重要な構成要素として貢献し、紙そのものの質感が複雑さと同時に鑑賞者に認識され

る(これらは互いに相容れないものとして認識されがちなが)。「紙自体の魅力を最大限に活用した作品の制作」をおこなうにあたっては、折り工程数の少ない作品だけの独壇場では決してない。長工程の作品でこれをこなすこともまた同じくらい困難で挑戦のしがいがあり、かつ魅力あふれる造形を取り出せる手段であると筆者は信じている。

自分のめざす作品形状イメージに必要な要素を盛り込むのに十分なだけの「構造的情報量」をもつ基本構造を組み(ここでは「設計法」が大きな力を発揮する)、全体の「視覚的情報量」の密度がバランスを保つように各部に関して空間的に解放するなどの調整をおこなう。…と、文字にしてしまうと感性もヘッタクレもないが、これが最近の筆者のしたいの基本方針である(…マンネリ化しないうちに、早く次の新方針を開発せねば…)。

<生物と造形物のあいだ>

多くの情報をバランス良く、適所に配置できた作品は、各部分の相互作用により、鑑賞者に対してさまざまな印象

を喚起する形状となる。単純な、「幾何的かたち」と「結合力」しか持たない「原子」「分子」が、細胞、組織、器官(折紙作品ではカード出しの骨格構造や魅力的なパーツに相当するだろう)を形成して、さらにこれらが有機的に相互作用することにより、個体つまり一箇の作品となる。生物という複雑なシステムに精神が宿るというのなら、造形物にも、その複雑さに応じた精神が、もしくは生命とでもいべきものが内在すると言えるのではないか、と考えたくなる今日この頃である(ここで使っている「複雑」ということは単に折り操作の難しさや工程の長い作品などだけを指すのではない、ということはもちろんおわかりいただけるであろう。…しかし、生活の大部分に於いて科学という立場にいる筆者が(本職が生物学なので)このようなことを述べて良いものかどうか)。最近の筆者には、「かたち」と「生命」が同義語であるかのように思える(…そろそろヤバイか?)。

<おわりに>

折り紙という分野は決して、「やり尽くされた」分野ではない、むしろやっとスタートラインが引かれたところだ、ということ最近つよく意識するようになった。これからどんな新発想をもったひとがあらわれ、どんな新作品が生まれてくるのだろうか。それを見るのが今からとても楽しみである。もっともっと驚きたい。これを見るためだけにでも、長生きする価値はあると思う。

折り紙
という
方法

北條
高史



とこが折紙時評やねん

前川 淳

まえかわ じゅん Jun Maekawa

■今年は折り紙がけっこう忙しそうです。

第14回
この紋所が
目に入らぬか!

実は、初め今号のために暖めていたネタは、一カ月前に探偵団のインターネット電子掲示板に掲載してしまったのである。内容は前号の続きで、「青森県の折紙山と長崎県の折紙鼻、そして、千羽鶴の故郷・三重県桑名市が、折鶴基本形の半分にぴったりの二等辺三角形を構成している!!」という、ウソのようなホントーの話だ。「奈良の大仏は宇宙人の遺産だ」とか「超能力で鼻毛の数が読める」などという本を出している某出版社もびっくりのトンデモ話である。それをここに再掲してもよいのだが、読んでしまったひとには申し訳ない。「インターネットの環境がない。読んでみたいぞ」というひともあるかもしれないが、はっきり言って、読んでも何のためにもならない……何のためにもならないのは毎回同じか……。

てなわけで、今回は地名→人名の連想で、家紋の話である。この話題も佐藤健太郎さんに振られて電子掲示板で少し触れたが、あれはほんのさわり。家紋は奥が深いのである。

奥が深い証拠に、中学時代、家紋が趣味という同級生がいた。彼から聞いた話で今でもよく覚えているのは、「朝顔の紋」のことだ。朝顔と言っても植物の朝顔や桔梗のことではない。男性用の便器のことだ。最近のものは違うが、かつてのそれは朝顔の花のような格好をしていた。その便器に開いた孔のかたちを「朝顔の紋」と言うのだそうだ。この話は頭にこびりついていて、今でも用を足すときに「最近の朝顔紋は単純なものが多いなあ」などと、孔を見つめていることがある。

家紋好きの彼は、授業中にノートの片隅に家紋を描いて、休み時間に「これは『おっかけ苺荷』の紋だ」などと言って見せてくれた。紋章絵師や呉服屋の息子というわけではなかったはずで、今考えると実にヘン

なやつだが、彼がわたしを鑑賞者に選んだのは、わたしが家紋にそれなりの関心を示したからであろう。実際、家紋にはパズル的な面白さがあり、わたしはそうしたものが好きだった。

家系や歴史といったことを無視しても、家紋には幾何学的な面白さがある。というより、少なくともわたしにとって、幾何学的デザインが家紋の魅力の中心だ。はかなぬ伏見康治氏も家紋にそうしたアプローチをしたひとだ。三十年前雑誌「数学セミナー」に連載された、家紋を対称性で分類する氏の論文は、いずれバックナンバーを探して全部読んでみたい。

そのような家紋に、幾何学と相性のよい折り紙が登場しないわけはない。まずは、折鶴。組み合わせによって多彩なバリエーションがあり、中には、折鶴だか何だかわからなくなるまで、デザイン化が進んだ「三つ折鶴亀甲」紋や、沢瀉(おもだか)紋によって折鶴を見立てた、見立ての見立てともいうべき紋(折鶴はそもそも鶴への見立てだ)もある。

折紙紋なる紋もある。これは、まったくと言ってよいほど使われていない紋のようで、文献によっては、「名前のみで紋のかたちは不明」としているが、正方形の隅を小さく折ったものを四つ並べた紋がそれにあたるらしい。ここでいう「折紙」は、「折紙付き」の折紙、すなわち、鑑定書などの二つに折った紙のことであると考えられるが、紋のかたちはそれとはすこし異なっている。(ちなみに、前号で取り上げた青森県の「折紙山」も、「日本山岳ルーツ大辞典」(池田末則監修・村石利夫編著 竹書房)によると、山容が二つに折った紙に似

ることが山名の由来とされている)

この他にも熨斗や御幣の紋、結び文の紋がある。そして、面白いのが、既成の紋を折り畳んだことによってつくられる紋である。本家の紋から新しい紋を派生させる際にこうした変形が行われたらしい。柏の葉や鷹の羽といった、実際に折れるものだけではなく、厚みのある野菜などまでが折り畳まれ、騙し絵のような味わいを見せる。図に挙げたものは、中心に孔の開いた正方形(釘抜紋)を折り畳んだ「折釘抜紋」であるが、注意深く見ると、実際に孔のある紙を折り畳んだ図形にはなっていないことがわかり、ちょっとした間違い探しのパズルのようである。

以上は、折り紙に関連する家紋のほんの一部である。家紋の他にも、自治体や学校の徽章に折り紙テイストあふれるものがある。都留高校の校章に折鶴が使われていることは前号でも触れたが、たとえば、津山高専の校章も折鶴を使っている。ただ、工の字と折鶴を融合した図形なので、一瞥では折鶴には見えない。また、南部藩時代のものを引き継いだ盛岡市の市章は、「南部印」(菱紋)の組み合わせであると同時に、南部家の「鶴紋」を折鶴で表現しているとの説がある。

家紋一万種以上、日本の自治体は三千、学校の数も一万校以上ある。「掘り出しもの」はまだまだあるに違いない。

なお、新しくつくった紋でも、百年使えば紋帳に載るらしい。家のしがらみのない折り紙好きは、和服を仕立てる際に、折り紙の紋にしてみてもどうだろう。えっ、わたし? わたしは、折鶴紋の紋付きを仕立てることを計画中だったりする。



三つ折鶴紋



折釘抜紋



三つ折鶴亀甲紋



折紙紋



盛岡市章

第3部第3回 桜

羽鳥 公士郎

はとり こうしろう
Hatori Koshiro

折り紙の哲学

タッチフットボールというのをやっています。
全国大会を目指して練習しています。



今回は、川村みゆきの「桜」を取り上げます。この作品を見るまで、ユニット折り紙はとるに足らないものだと思い込んでいました。この作品は、その翼を啓いてくれました。

私がユニット折り紙に魅力を感じなかったのには理由があります。

まず、ユニット折り紙で動物などをつくることができますが、これが折り紙としてはおもしろくありません。ユニット折り紙で動物をつくったとき、造形的手段として主に使われているのが、紙を折ることではなく、紙を組むことであるからです。これがおもしろいとしても、それはユニットを組み立てるおもしろさであって、折り紙のおもしろさではありません。

ユニット折り紙で立方体などの幾何学的な立体をつくることはありますが、これもまた折り紙としてはおもしろくありません。このことは、ユニット折り紙に限らず、一枚折りの作品にもいえることです。正方形の紙から立方体を折るのは、実際おもしろいことですが、そのおもしろさは、数学的なおもしろさ、あるいはパズルとしてのおもしろさです。パズルは解いているあいだが楽しいのであって、解けてしまうと、もう一度解きたいと思うのではなく、次の問題を解きたいと思うのです。これは折り紙のおもしろさではありません。優れた作品を折ると、もう一度この作品を折りたいと感じます。折り手に何度でも折りたいと思わせる作品でなければ、名作とはいえません。

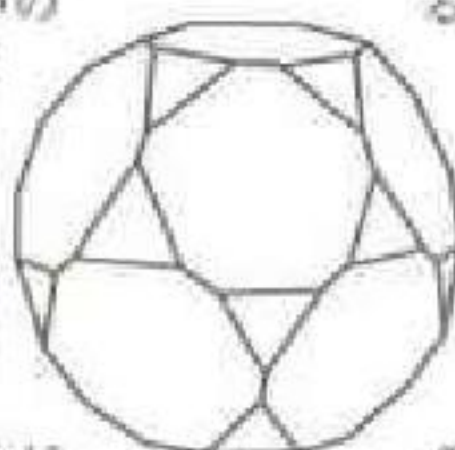
また、幾何学的な作品は、折っているときは楽しめますが、折り上がってしまえばそれで終わりです。立方体を眺めていても、おもしろくもなともありません。折り紙は折り手

だけのものではありません。紙を折らない人でも、作品を作っているところを見たり、作品そのものを見たり、あるいは作品で遊んだりして、楽しめなければなりません。演奏するのは楽しいけれど聞いてもつまらない音楽作品が名曲とはいえないのと同じように、折った後でも楽しめる作品でなければ名作とはいえません。

私が思うに、折り紙のおもしろさは、無機的な、単純な形をした紙から、有機的な、生き生きとした形が生まれるところにあります。以前、カブトムシの形をした紙からカブトムシを折ってもおもしろくないといいましたが、それと同じように、正方形の紙から正方形を折ってもおもしろくありません。

おそらく、ユニット折り紙の真価が発揮されるのは、くす玉だといえるでしょう。くす玉のポイントは表

面からなる立体ができます。(図)「桜」はこの立体をもとにしています。しかし、この立体自体は見えてもおもしろいものではありません。「桜」は、この幾何学的な立体からずれていて、このずれが表現力を持っているのです。たとえば、360度を5等分すると72度ですが、「桜」の花びらの中心角は72度より小さくなっています。(計算すると、およそ70.5度になります。)そのため、組んだときに、花

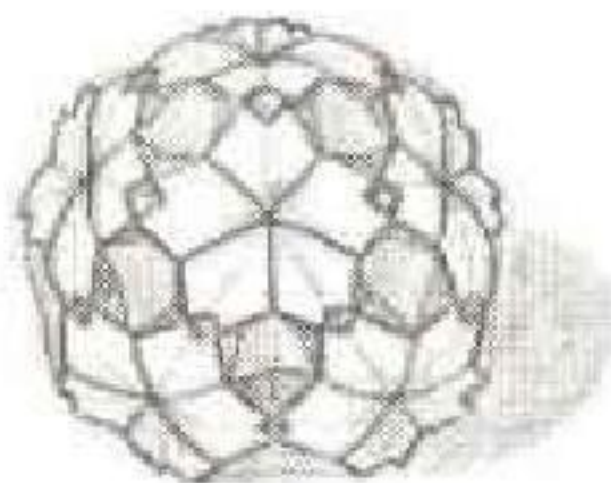


が平面にならず、中心が少しへこみます。そのことによって、花の立体的な表現が可能になっているのです。

さらに、この作品の優れたところは、花びらの表現にあります。花びらの形は、折り目によって表現されています。つまり、紙を折ることが表現の手段として使われています。その意味で、ちゃんと折り紙になっています。しかし、この作品は同時にユニット折り紙であり、紙を組むこともまた表現の手段になっています。ユニットを組んでゆくと、それぞれのユニットが引っ張り合い、個々のユニットが適切な角度で自然に曲げられます。そのため、使われている折り目がすべて直線なのにもかかわらず、この作品はむしろ丸みを感じさせます。そして、この曲がり具合が花びらの表現に大きな役割を果たしているのです。

ユニット折り紙は、紙を折って組むわけですから、その表現において、折ることと組むことがバランスよく組み合わさっていなければなりません。この作品は、紙を折ることと紙を組むことの表現力を、高いレベルでバランスよく発揮した作品として、特筆するべきだと思います。

川村みゆき
「桜」



折紙探偵団
第4回コンベンション折り図集

面の凹凸にあります。多くのくす玉は幾何学的な立体をもとにしていますが、表面の凹凸があるおかげで、有機的な、見る人に何かを語りかけるような形になっているのです。

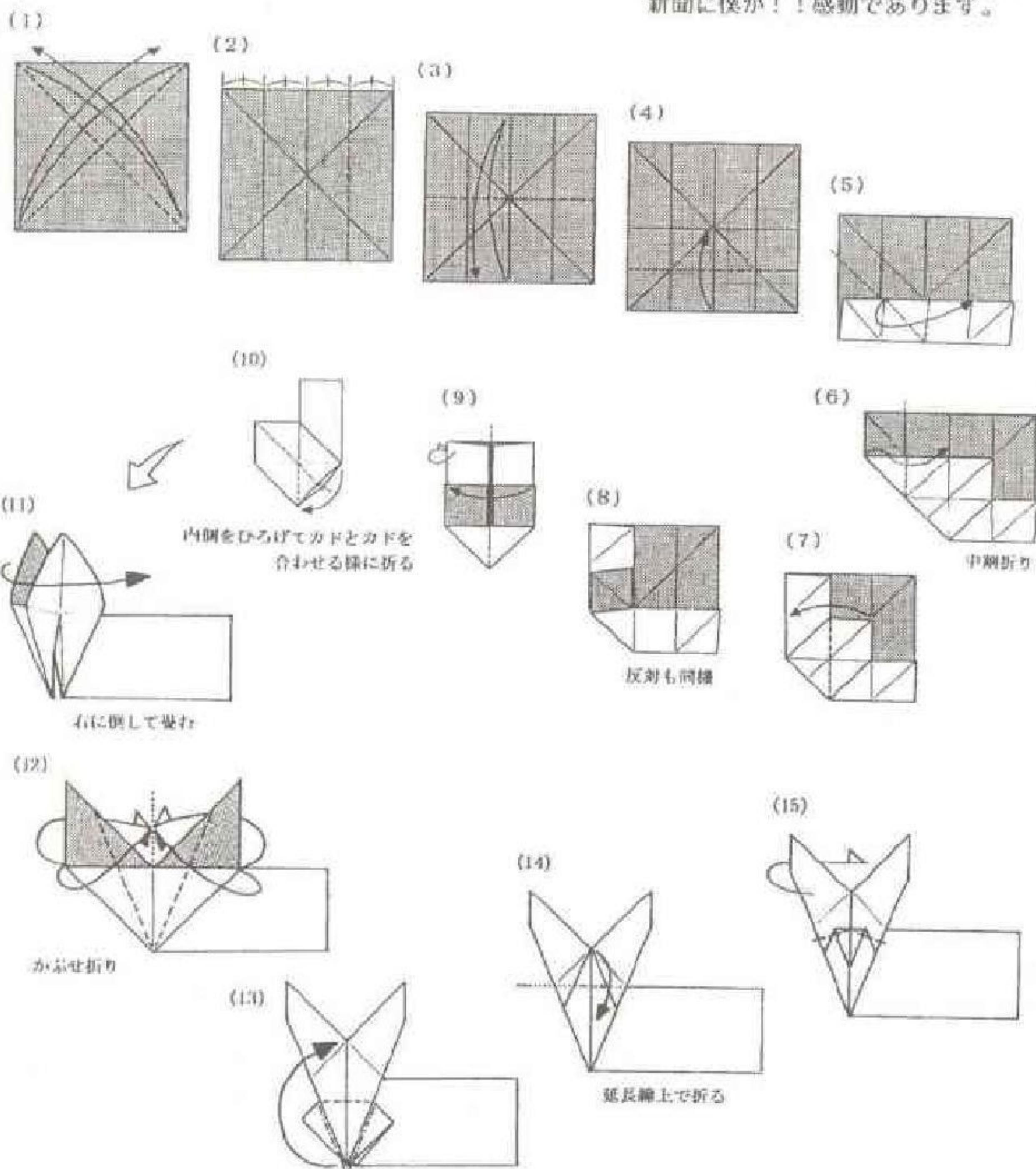
正十二面体のそれぞれの頂点を切り落とすと、三角形20個と十角形12

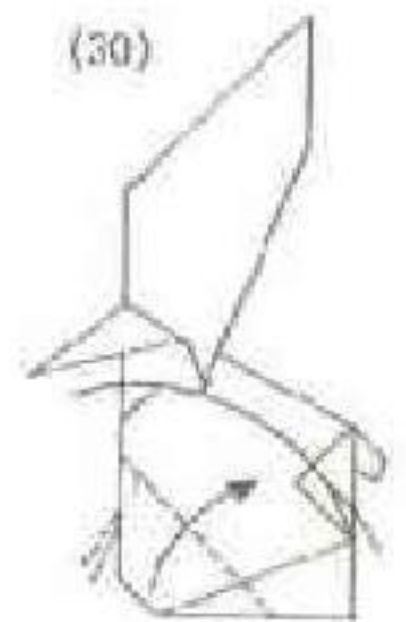
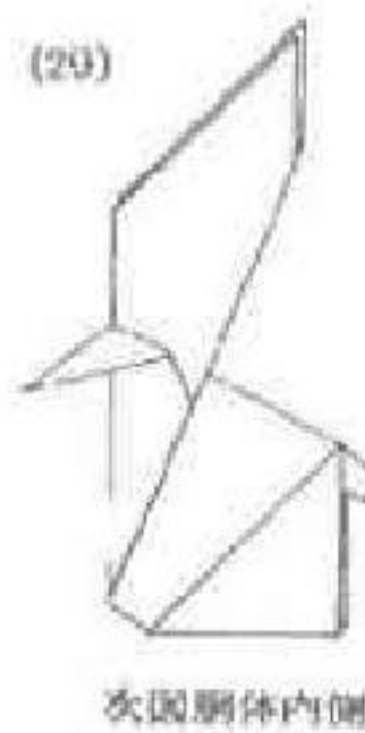
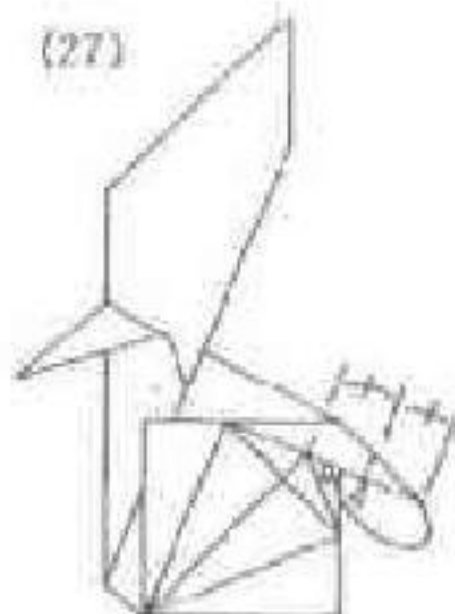
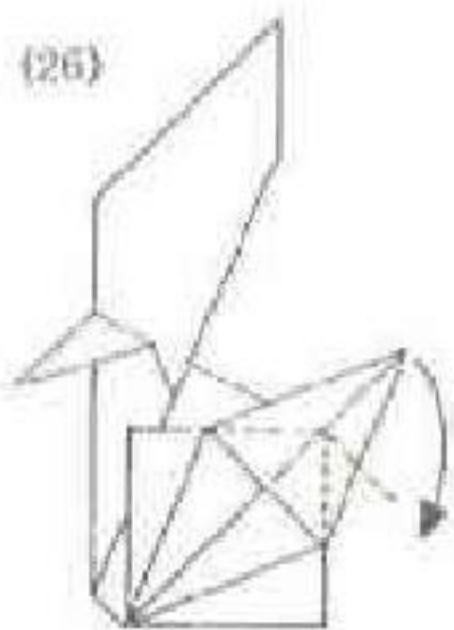
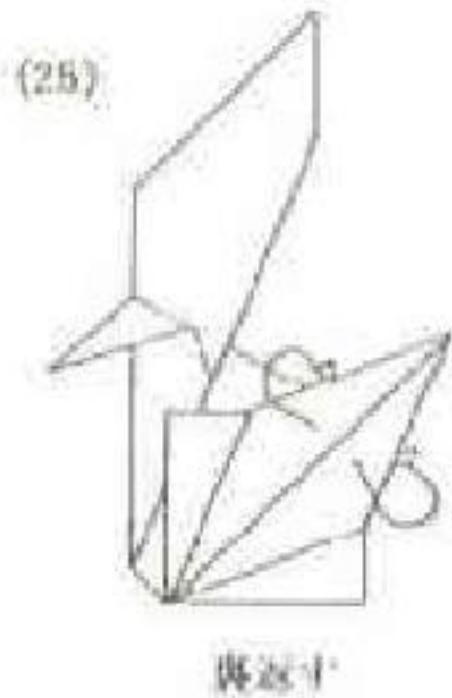
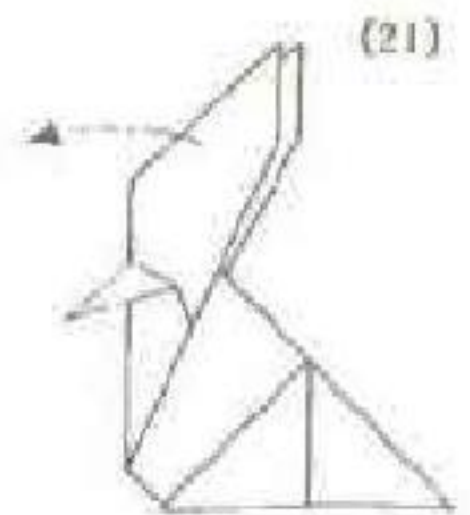
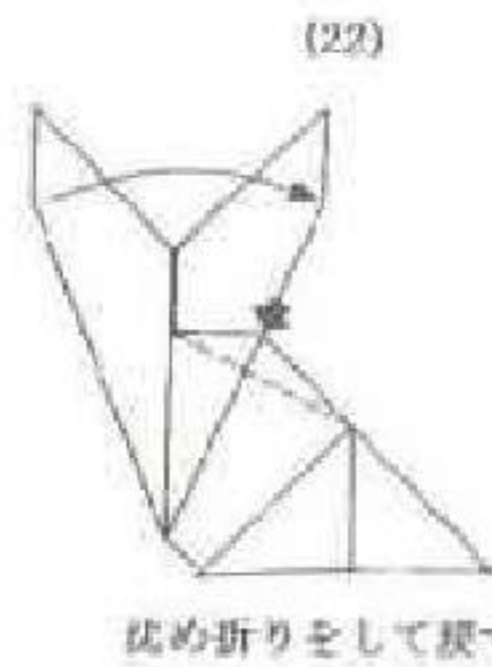
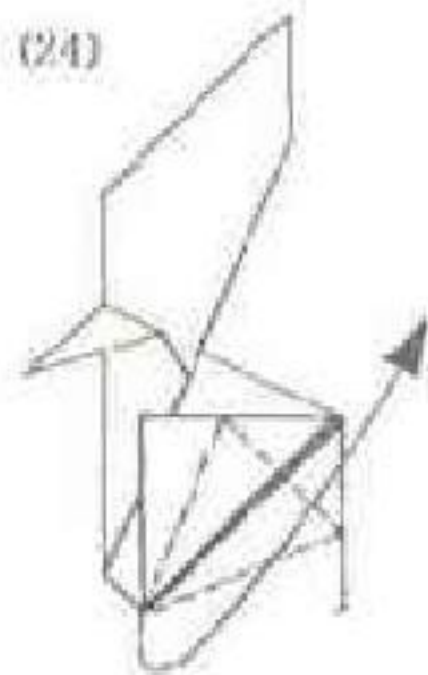
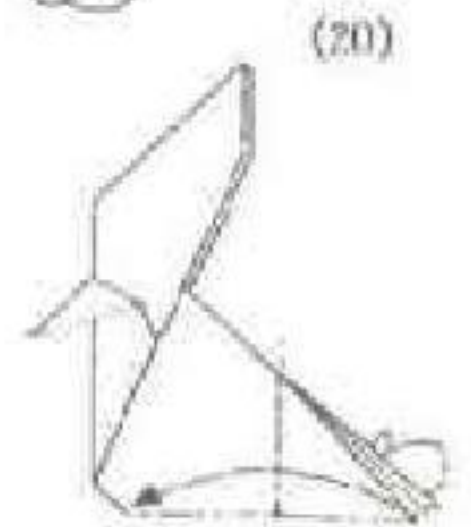
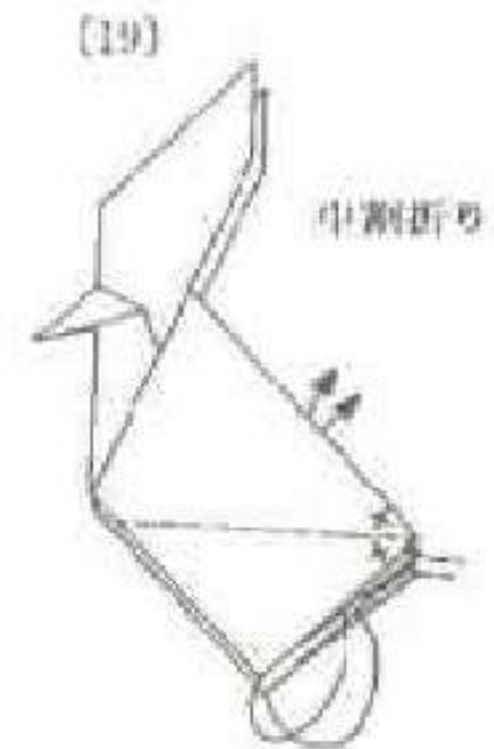
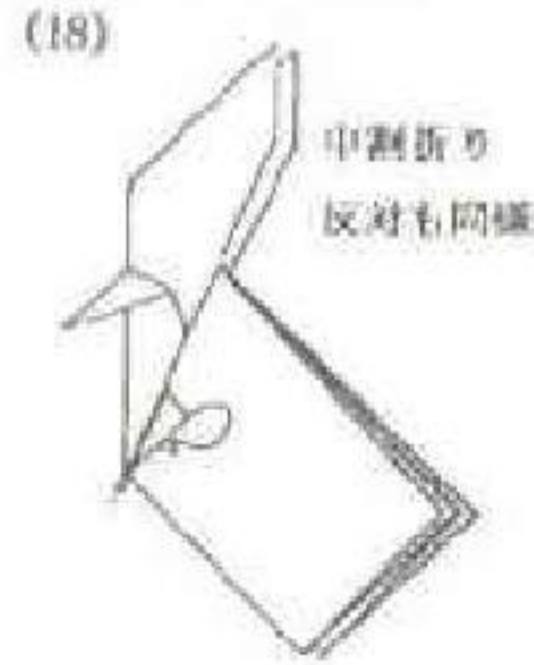
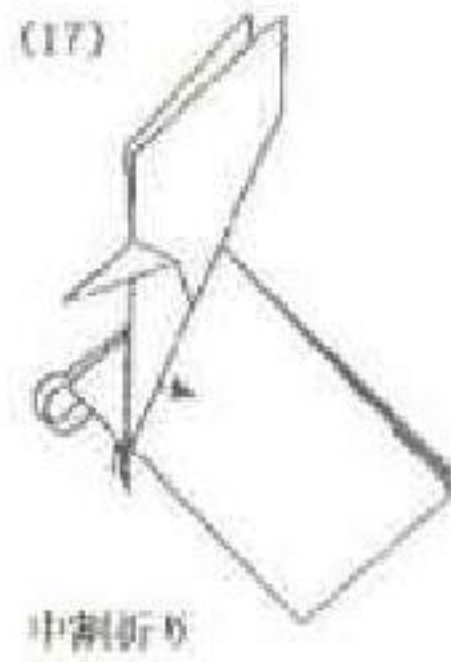
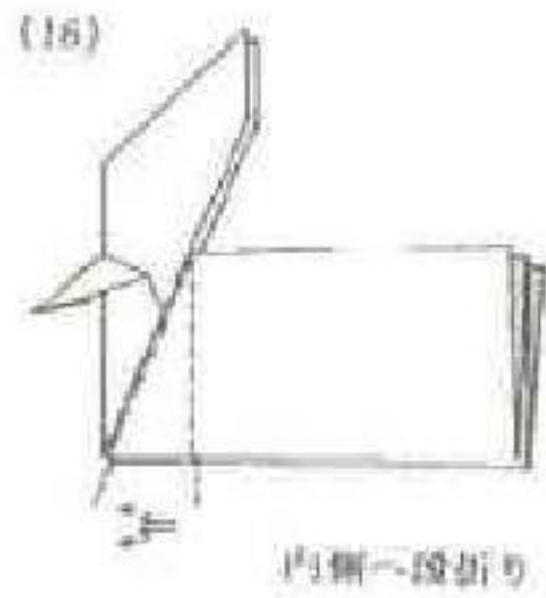
うさぎ

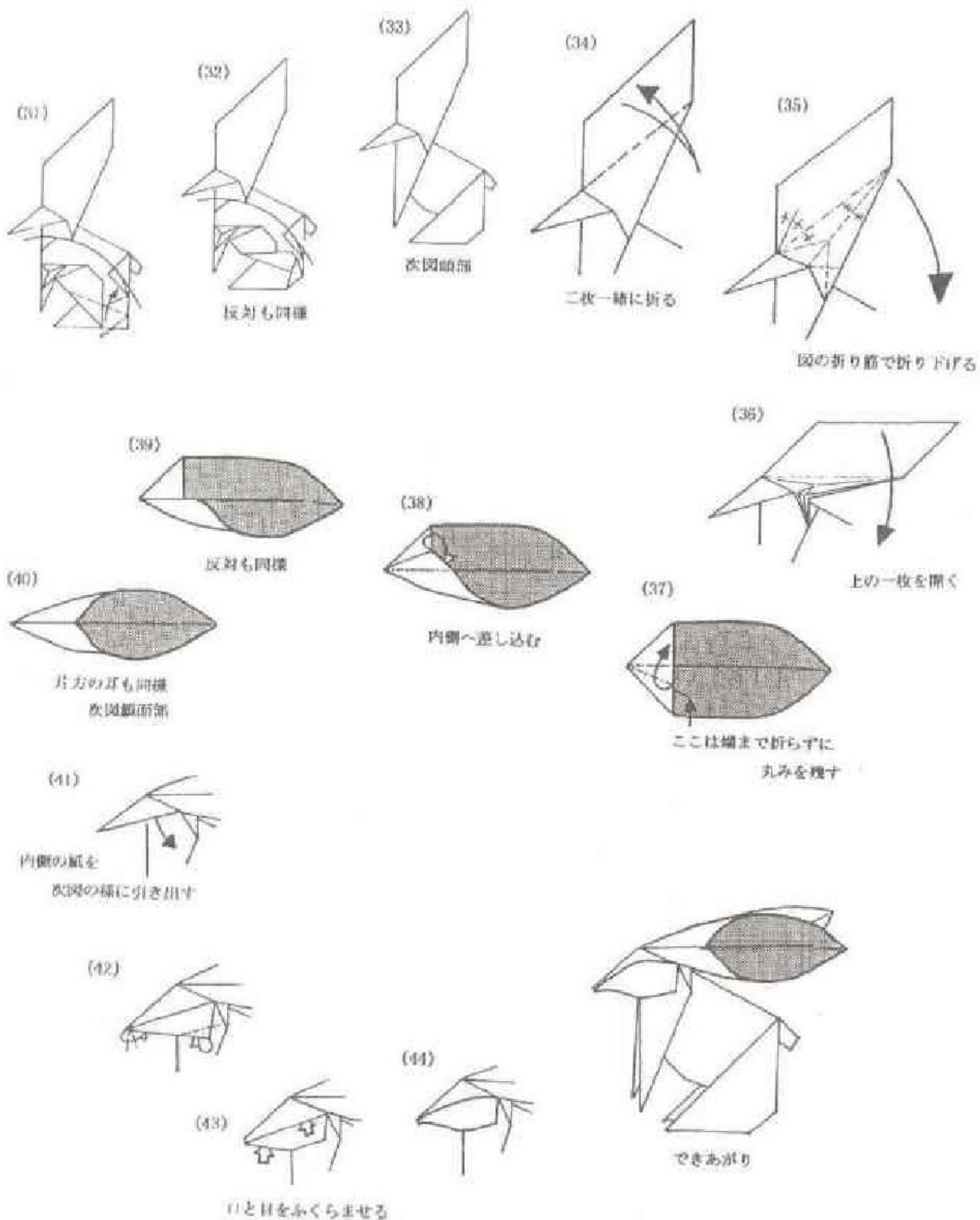
作・図 池上 牛雄

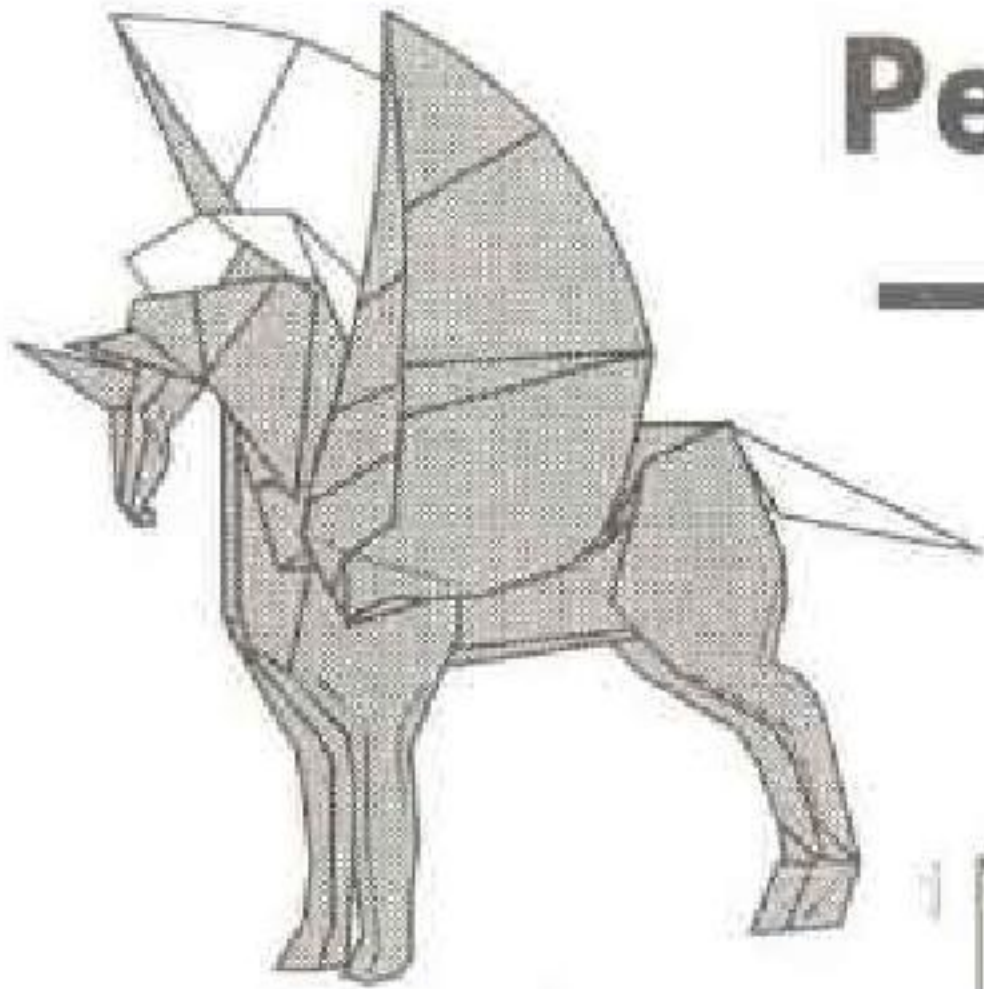
祝！新聞デビュー

はじめまして、池上と申します。
苦手な生物造形、しかも初手描き折り図でデビューです。憧れの探偵団新聞に僕が！！感動であります。









Pegasus with Unicorn

一角天

川畑文昭

Fumiaki Kawahata

創作 1998年6月

作図 1999年1月

半分に
折りすじを
つける

対角線に
折りすじを
つける

折りすじをつける

半分に折る

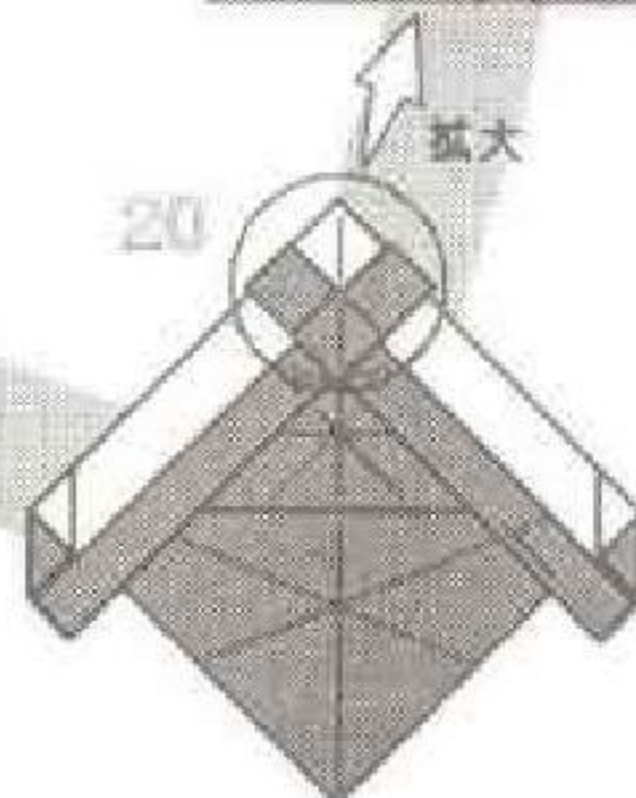
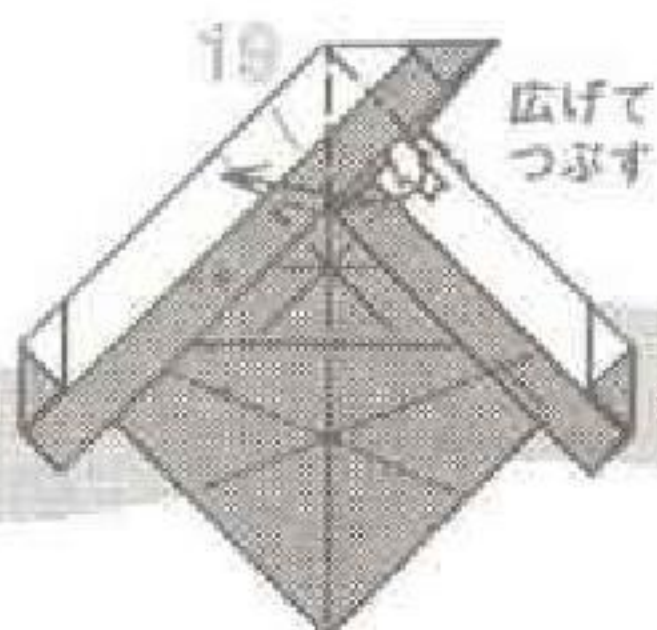
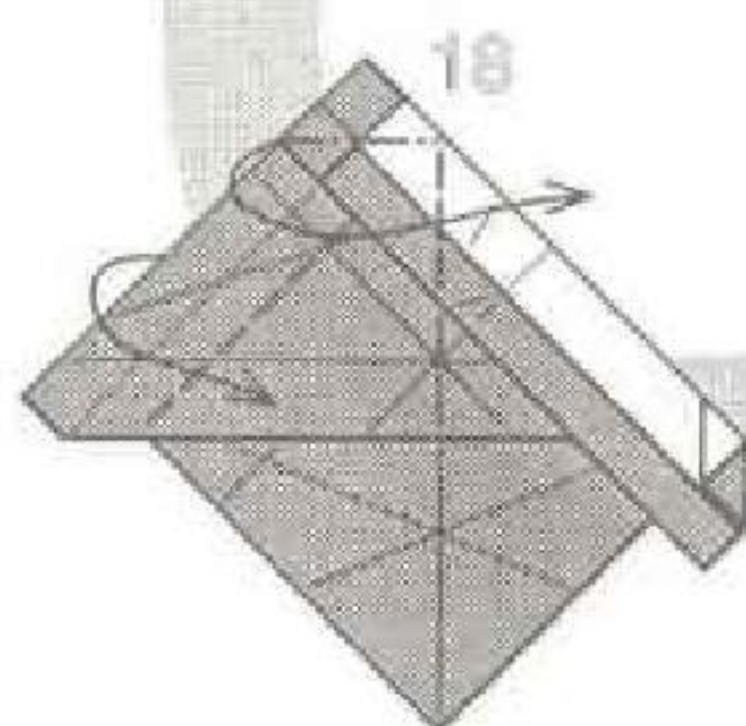
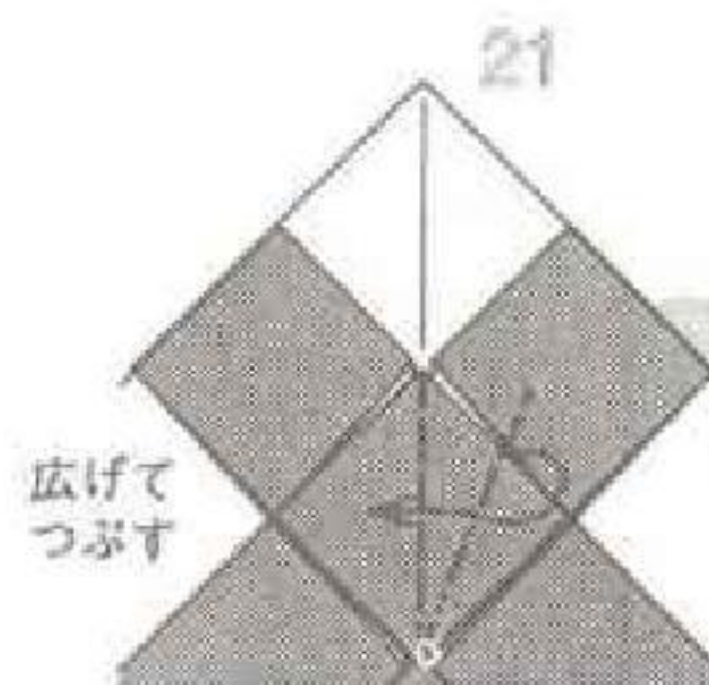
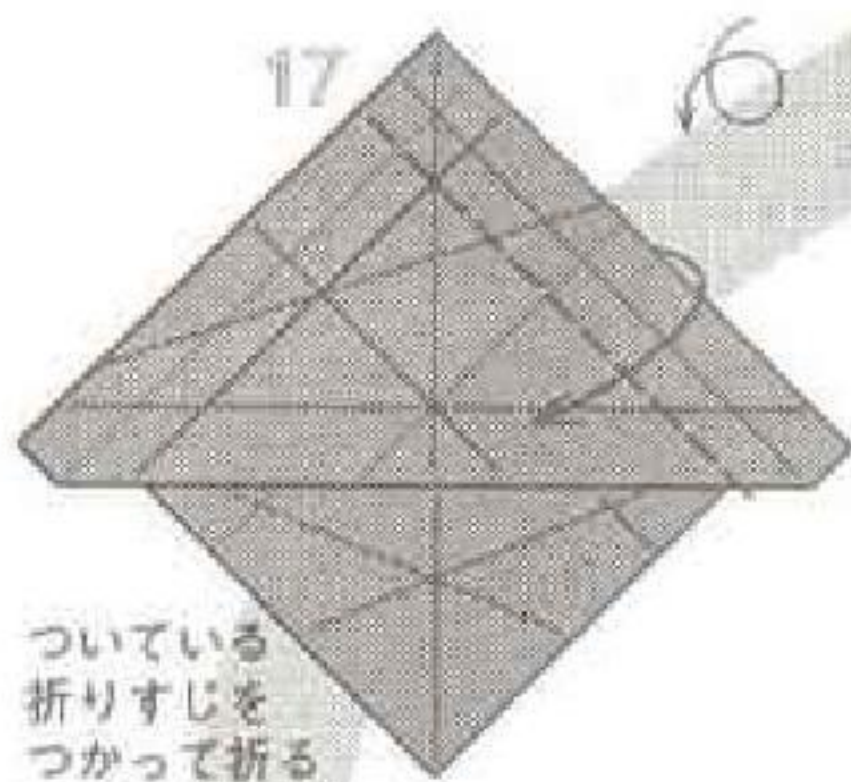
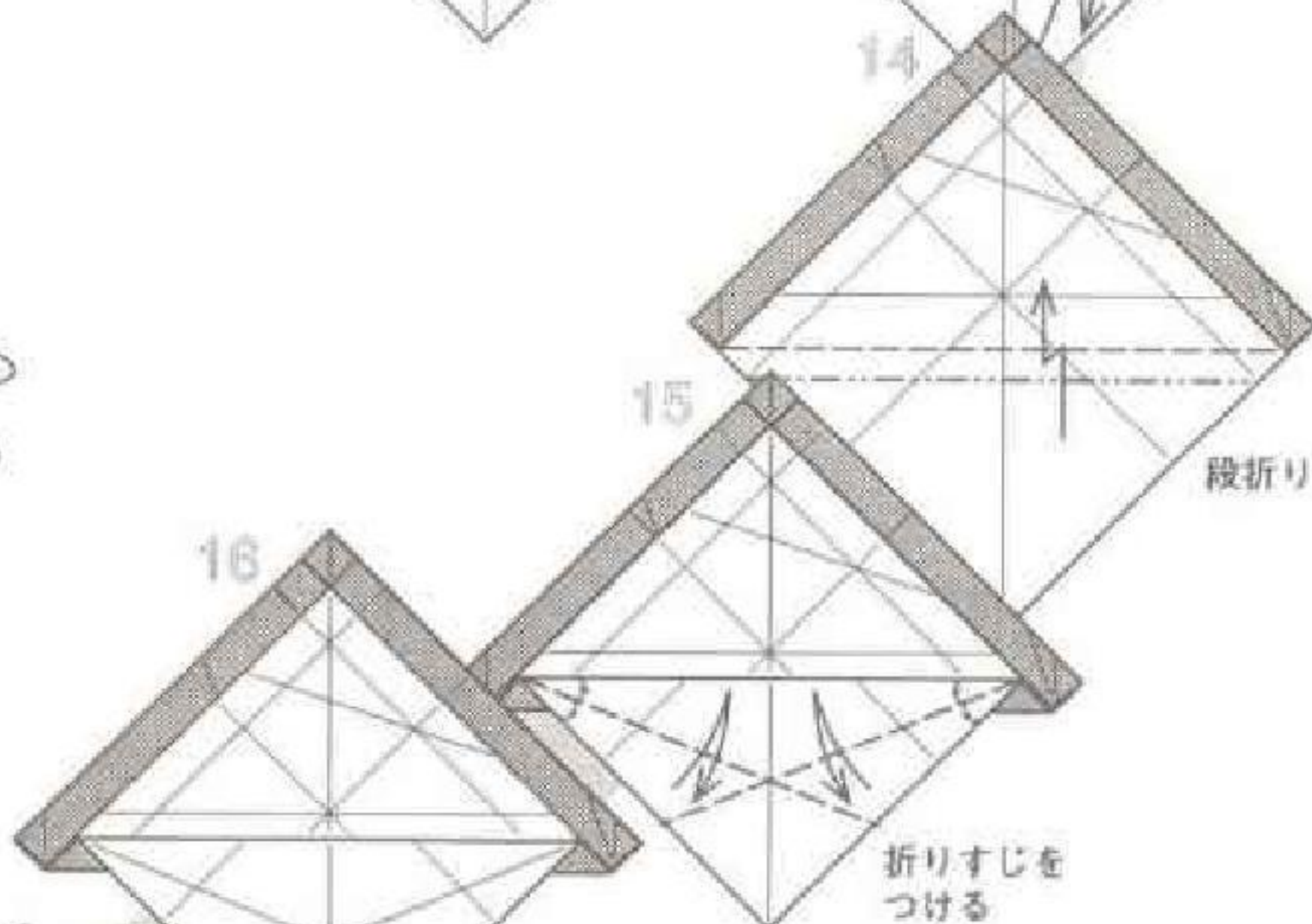
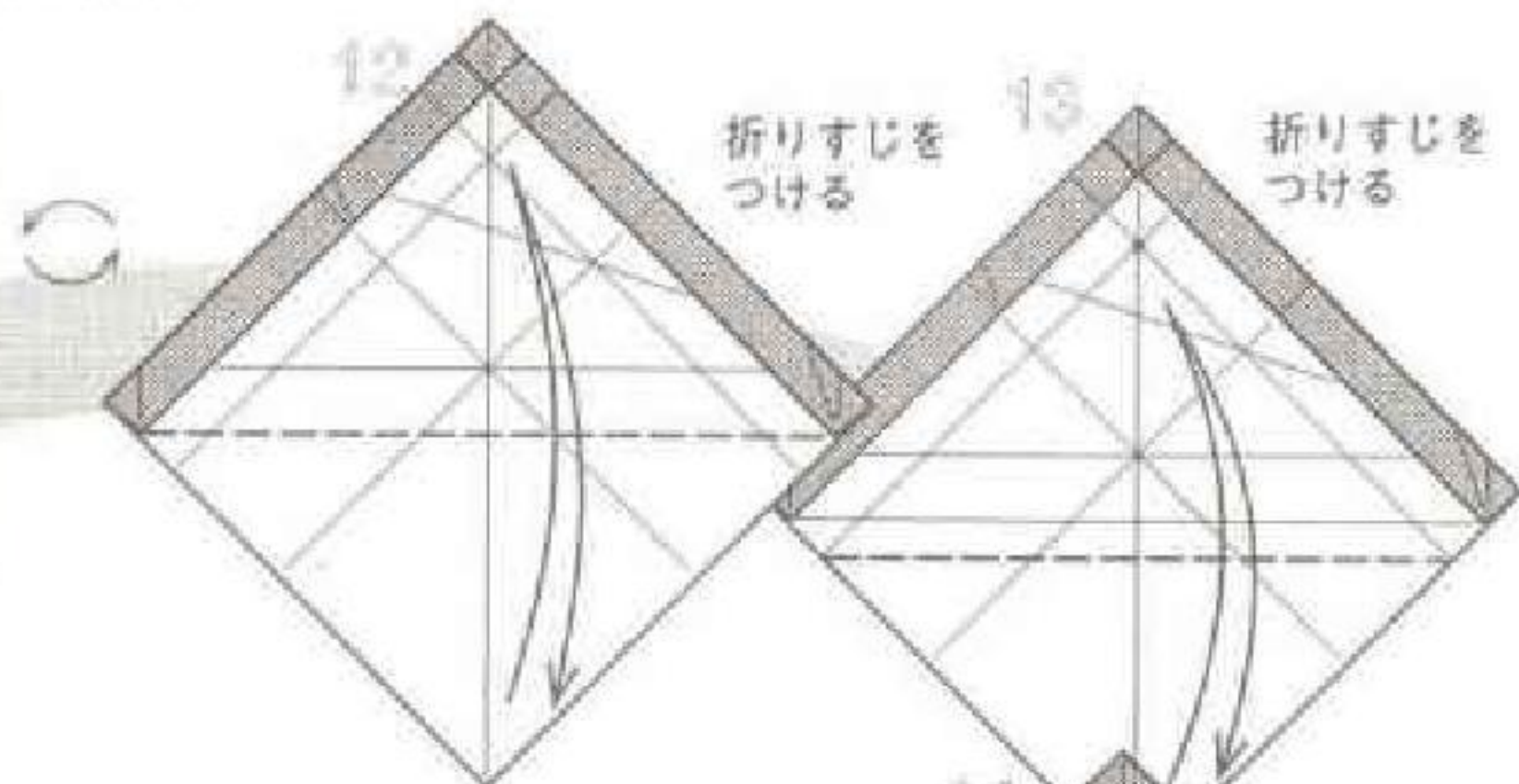
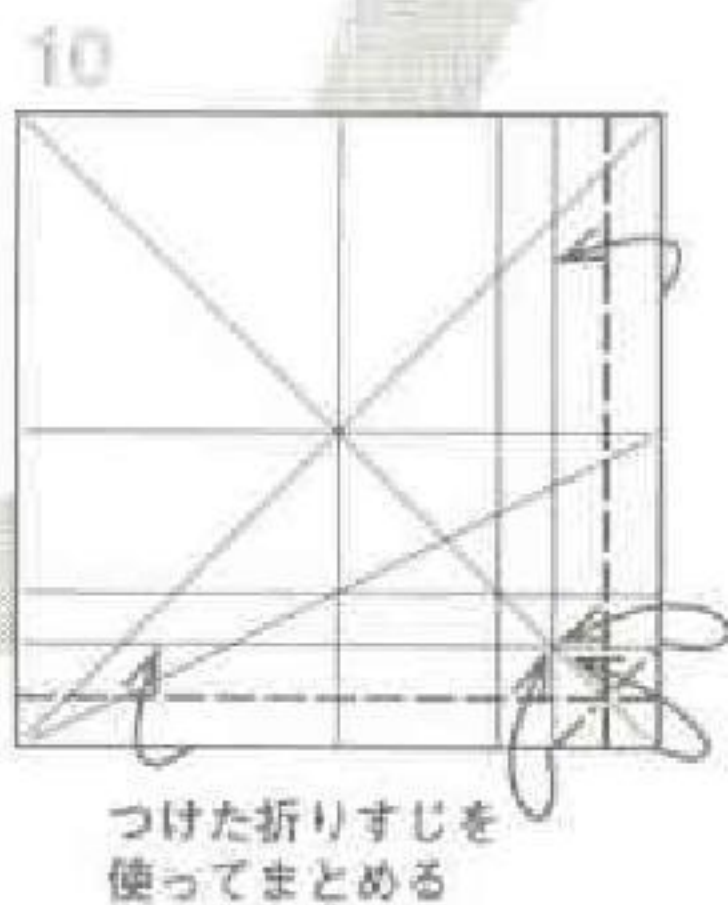
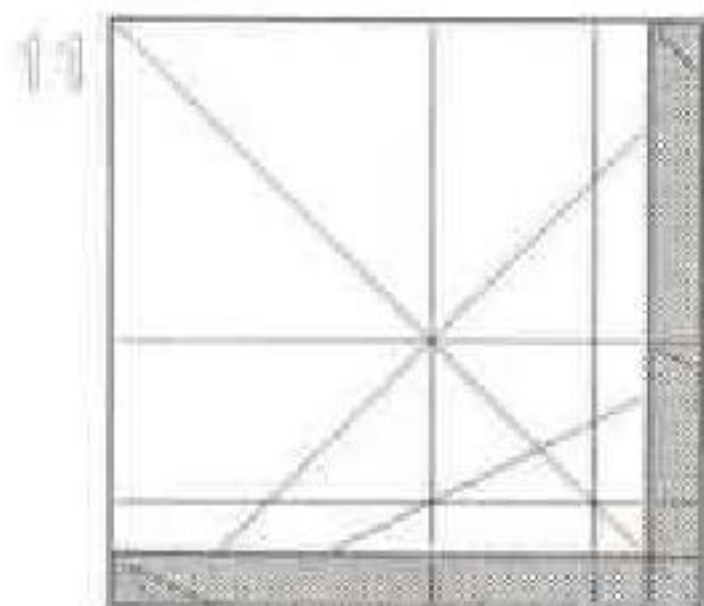
上の一枚を
対角線で折る

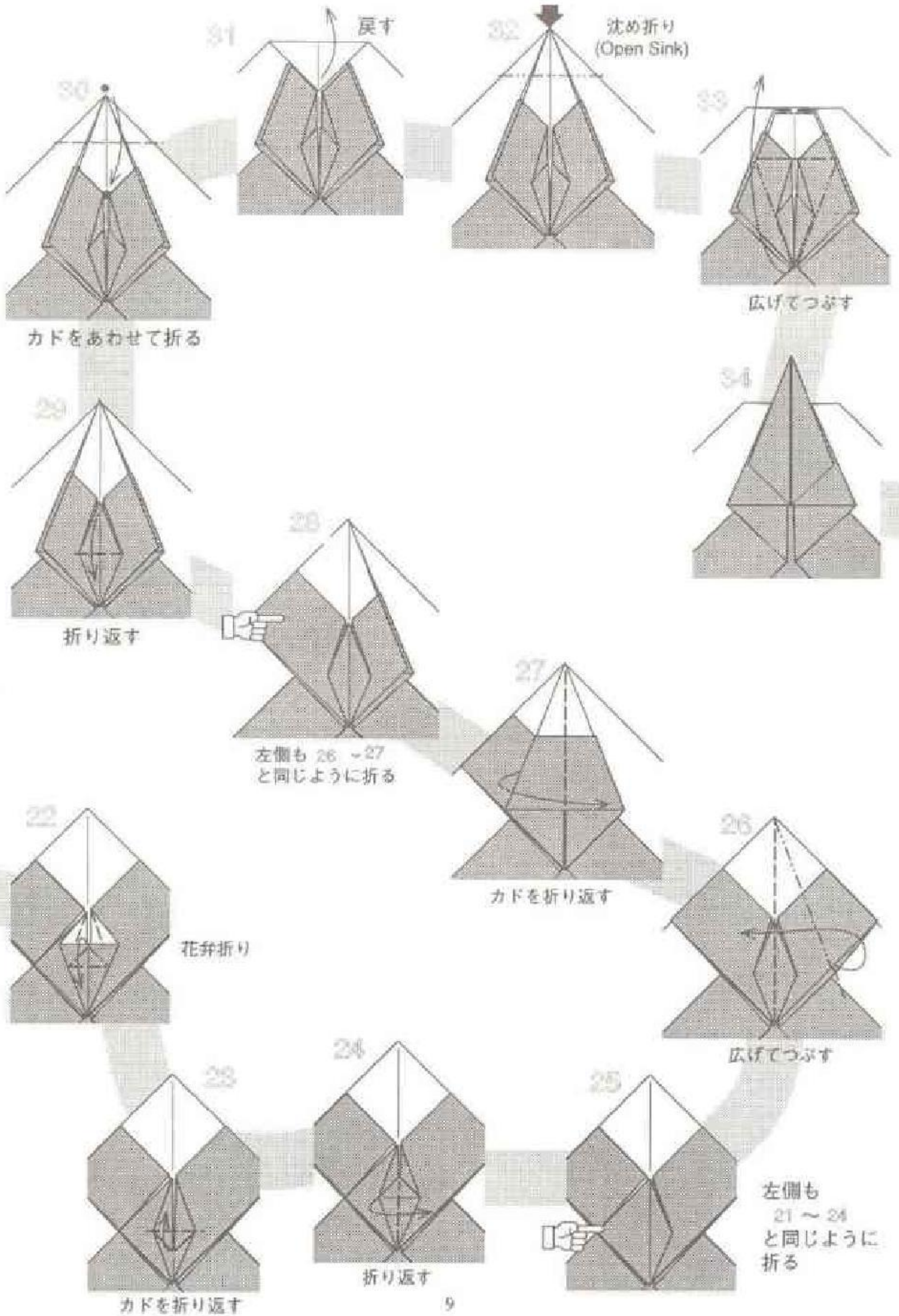
7でつけた折りすじを
基準に半分に折りすじを
つける

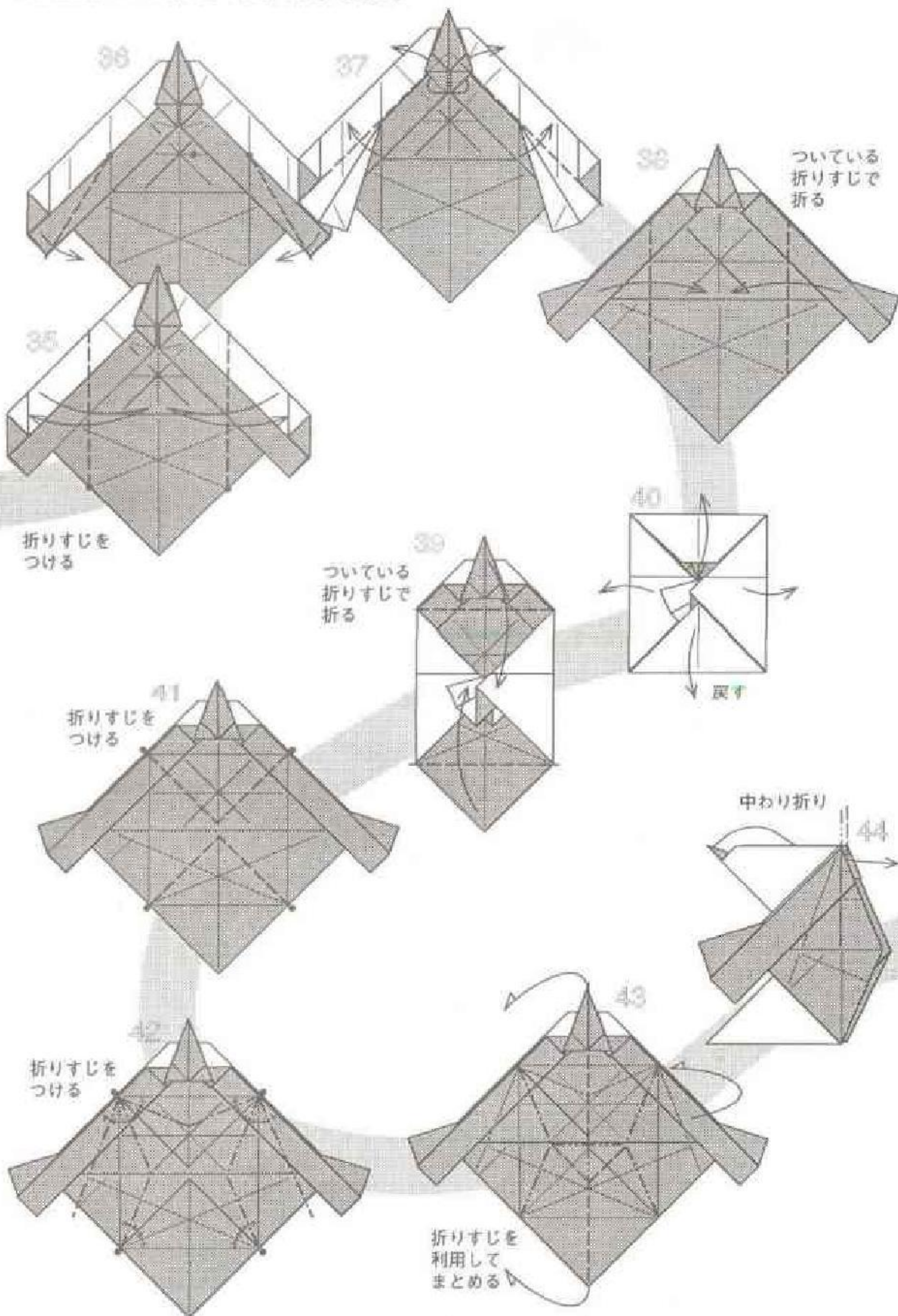
折りすじをつける

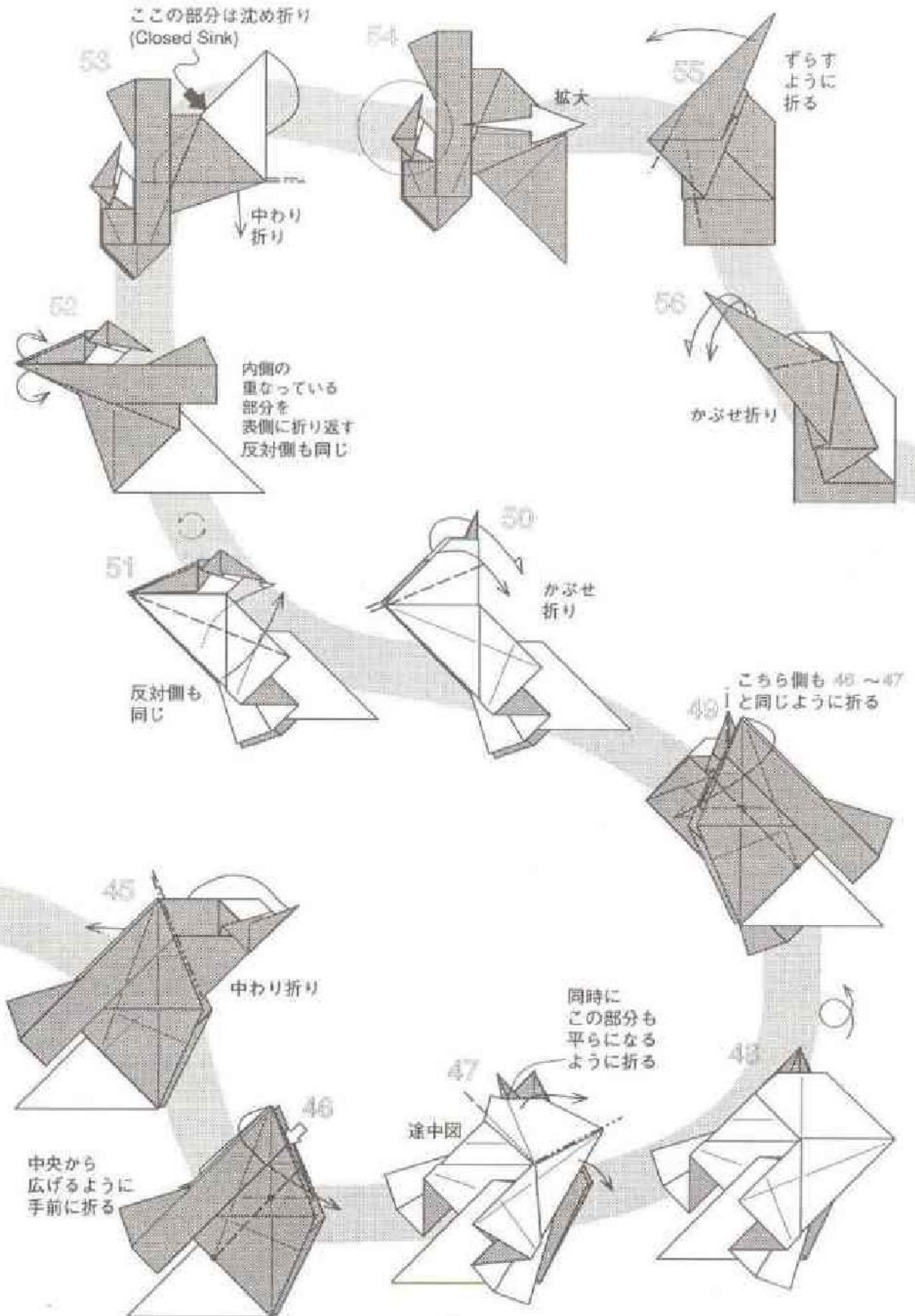
広げて正方形に
戻す

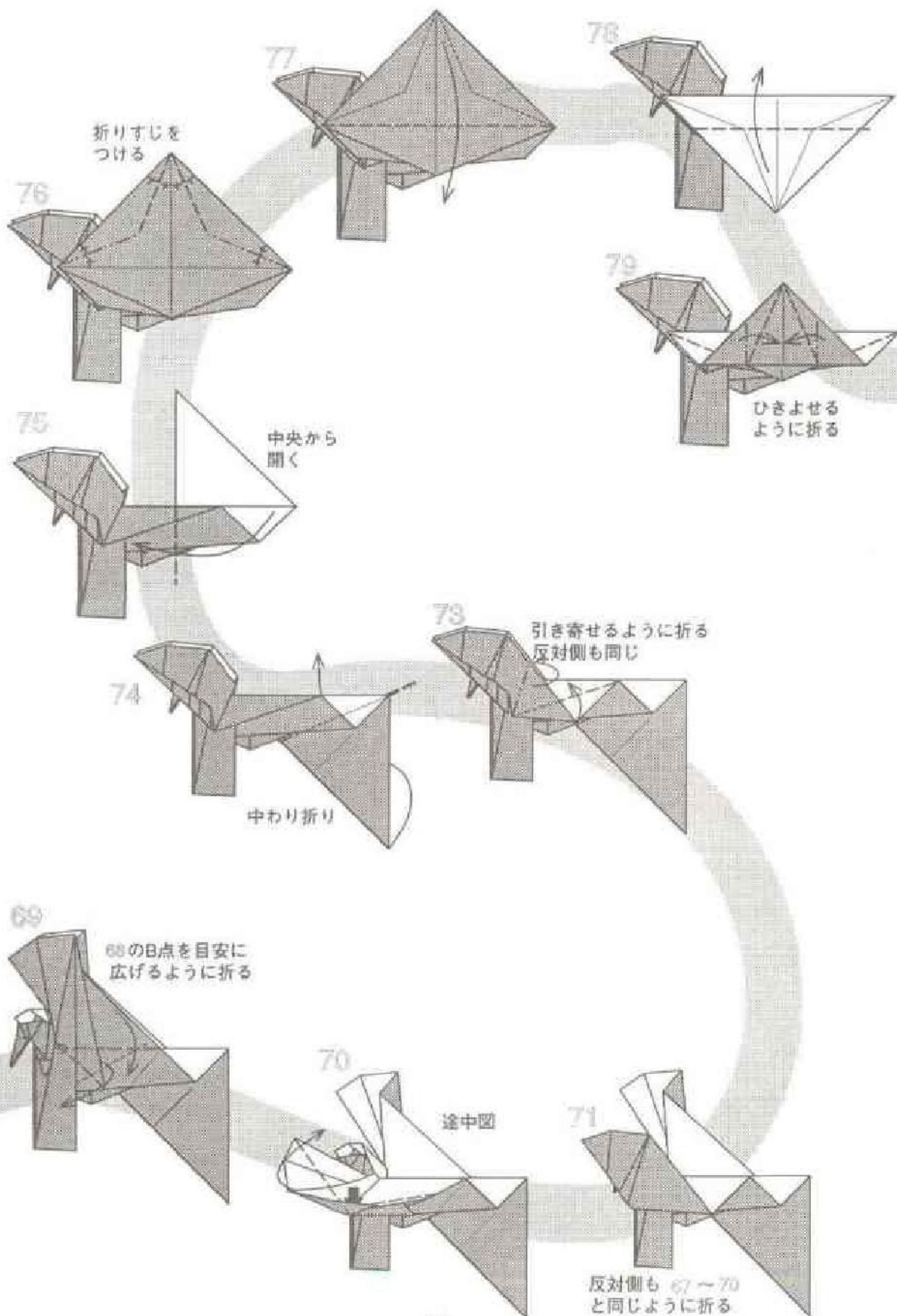
交点Aを基準に
折りすじをつける

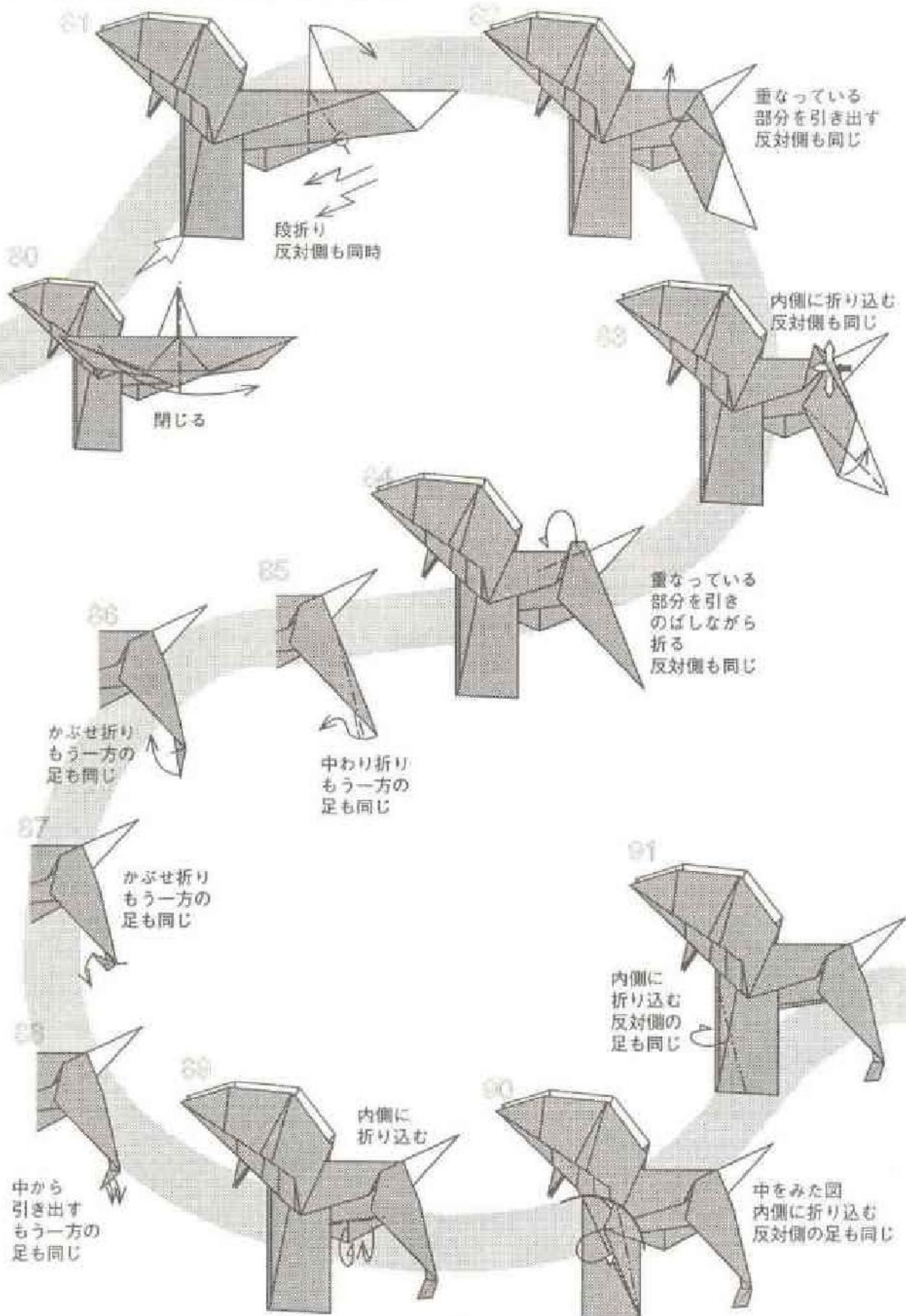


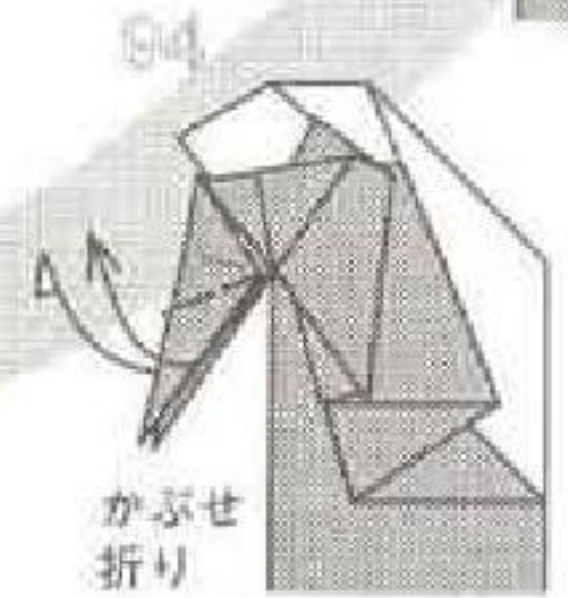
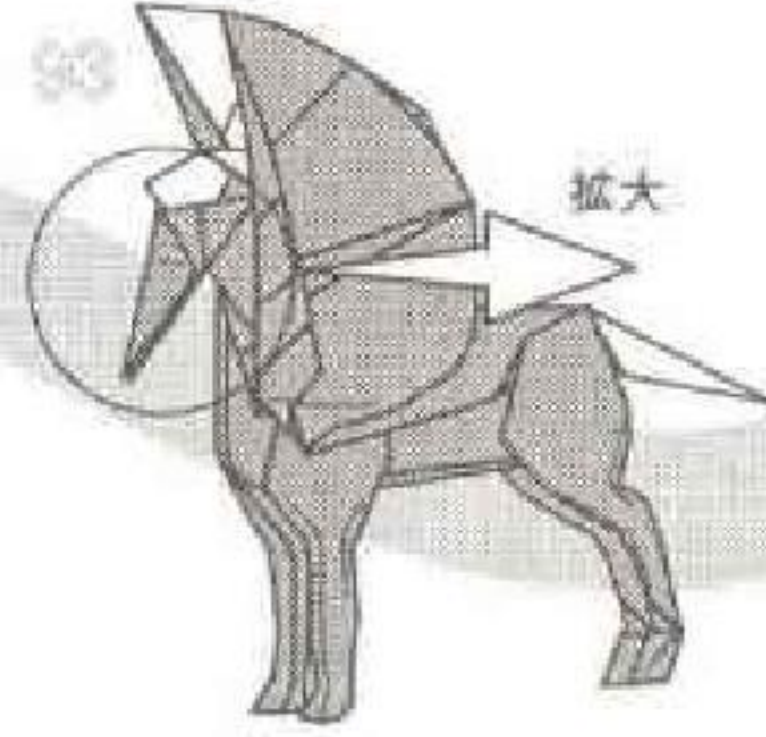
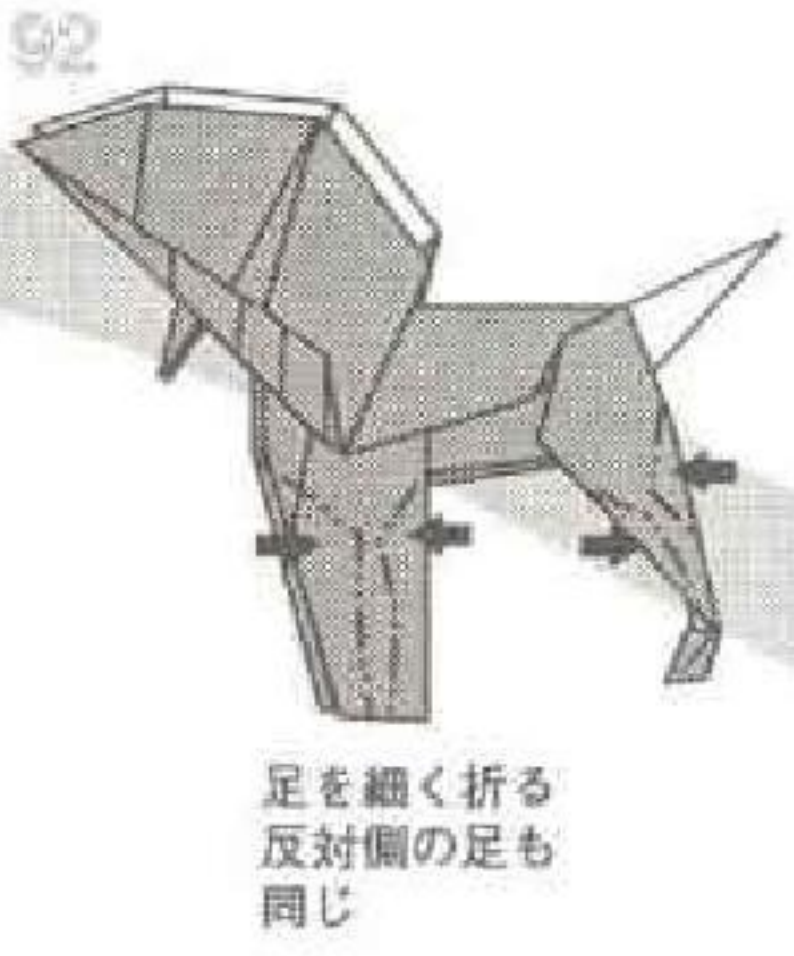
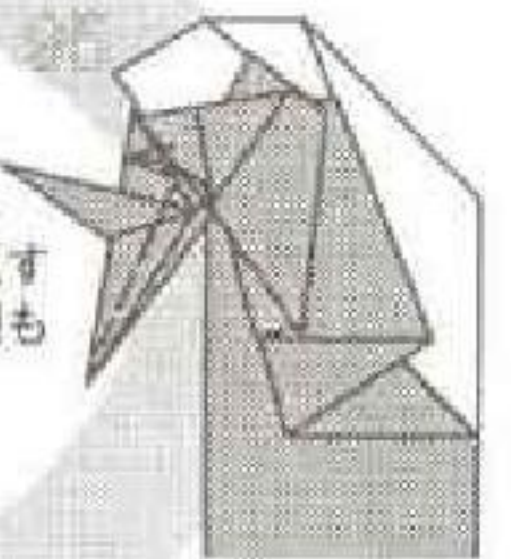
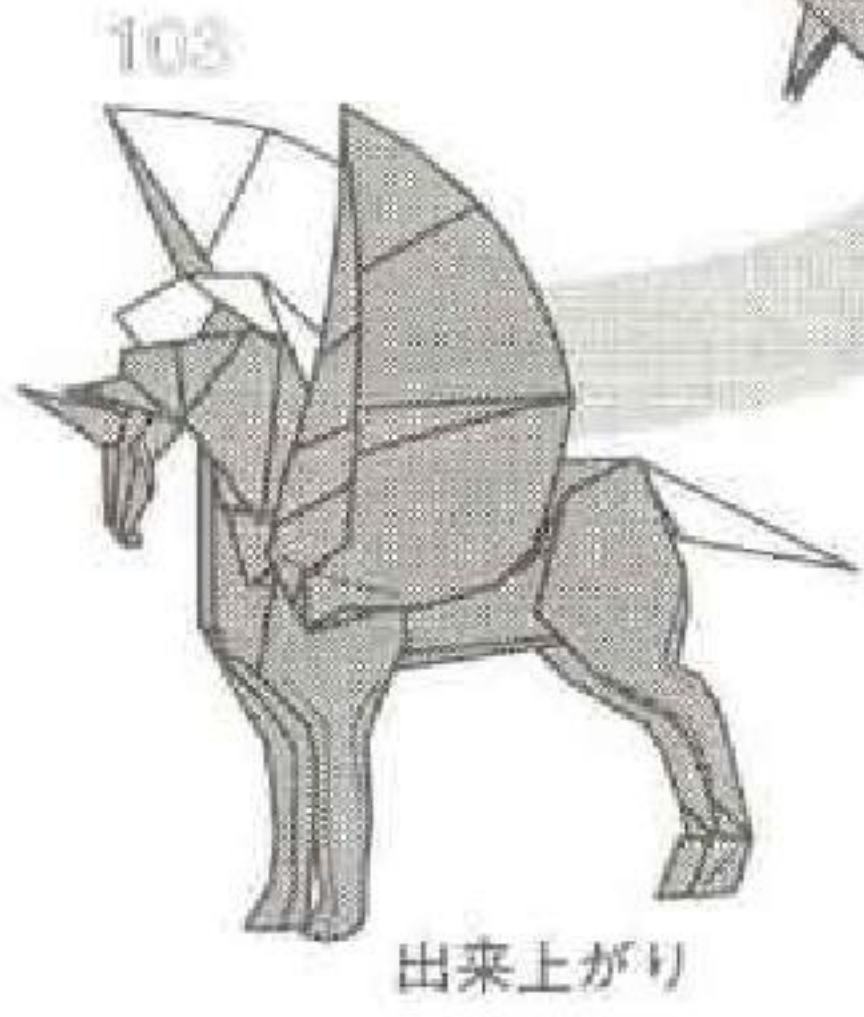
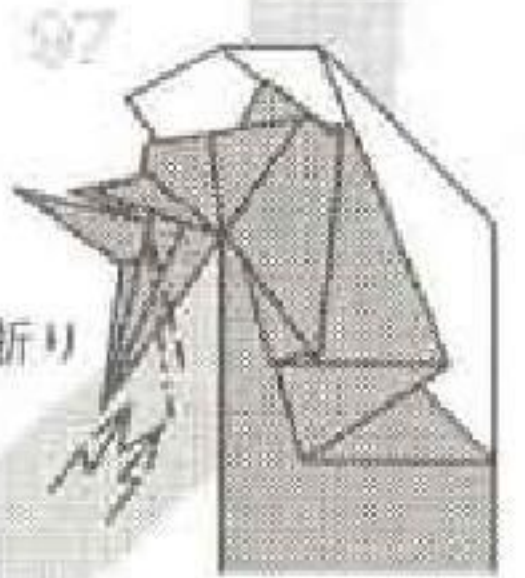
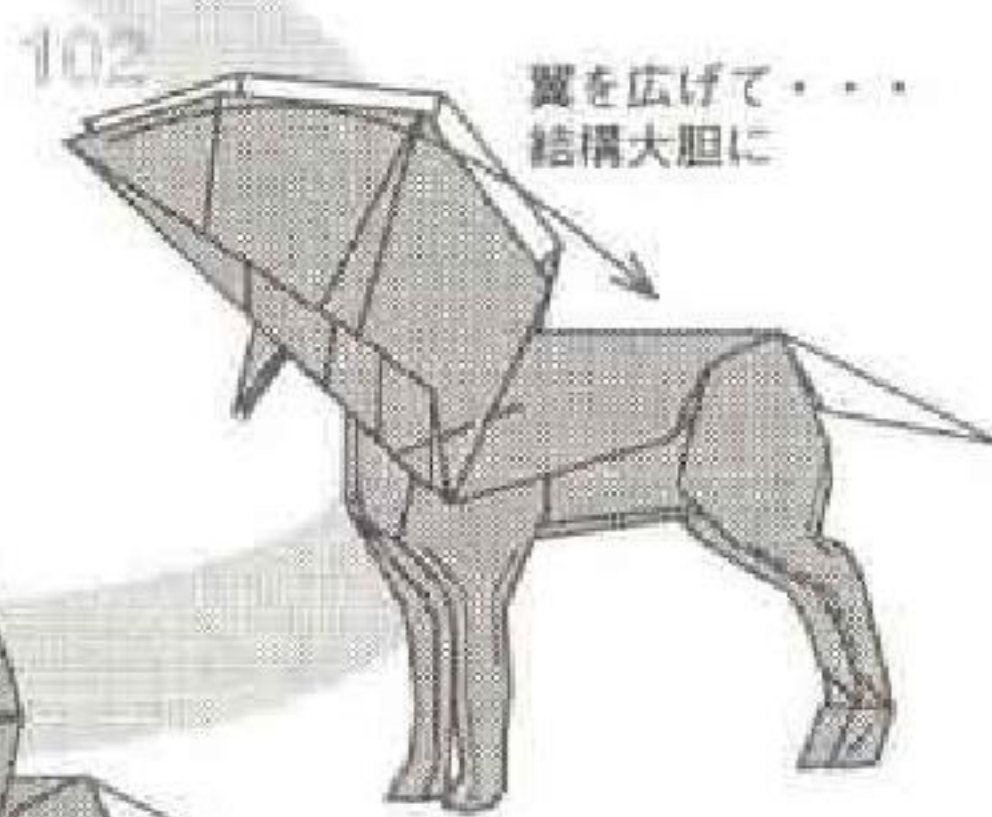
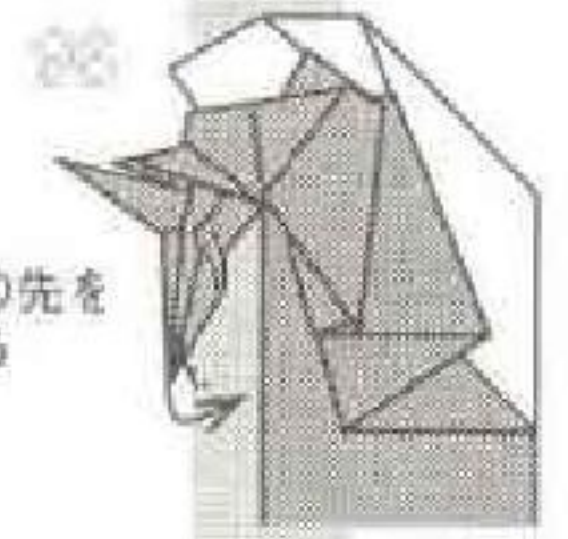
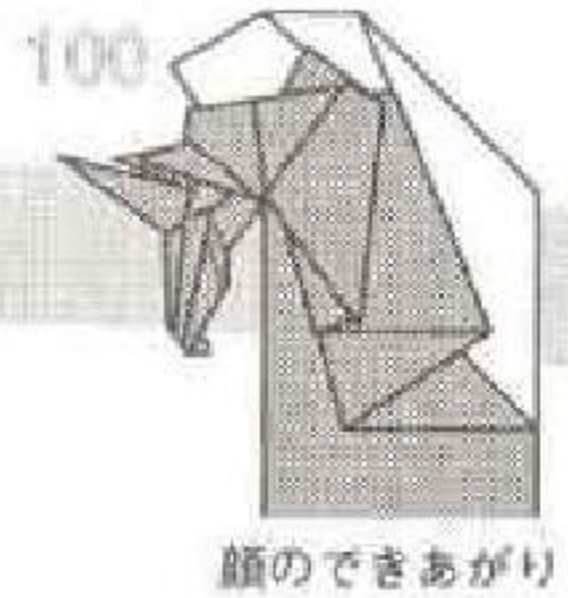
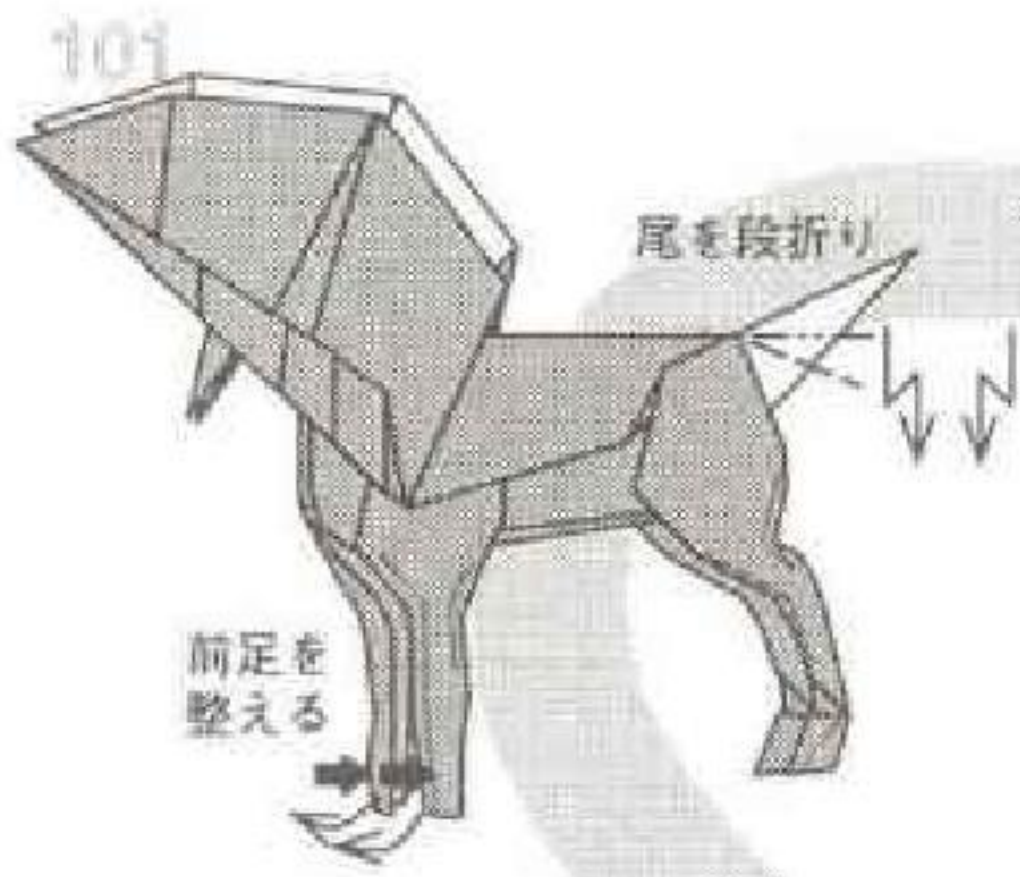












「折紙探偵団新聞」改め 「折紙探偵団マガジン」購読と 賛助会員募集のお願い

いよいよと言うべきか、ついにと言うべきか「折紙探偵団新聞」が10期目を迎えます。この9年間、隔月の会報を一度も絶やすことなく続けてこられたことは、多くの折り紙愛好家のご支援の賜物と深く感謝しております。既にお気づきのことと思いますが9期半ばから、「探偵団新聞」は増ページを続けております。また、これまでご容赦願っていた執筆陣への原稿料につきましても考慮すべき時期が来たと考えております。このような状況下、10期目から「折紙探偵団新聞」は「折紙探偵団マガジン」と誌名を変え紙面を刷新し、内容の充実を目指すことといたしました。これに伴い、購読料を3000円(海外\$30)とさせていただきたく、お願い申し上げます。今後とも本誌の購読のご継続をお願いいたしますと共に来期の購読料値上げをご承知願います。

継続は力

世界に類を見ない折り紙マニアによる手作り団体である「折紙探偵団」は、まさに継続は力の言葉の通り購読者数を期ごとに増やし、スタート時の約200名は、第9期において国内約700名、海外100名以上を数えております。この間、折り紙教室大会たる「折紙探偵団コンベンション」の開催や、ホームページの開設。草創期から発展期を共に過ごした故・吉野一生氏の名の下に基金を設立。これによる海外の折り紙愛好家のコンベンションへの招待、昨年は初の地方大会「静岡コンベンション」の開催など折り紙愛好家の交流の活性化に寄与してきたことと自負しております。このような折紙探偵団の活動を支える収入は、基本的には新聞購読料とバックナンバーの売り上げだけに頼っており、紙面作り、コンベンションの準備、ホームページの管理など多くは完全なボランティアに頼っております。(表参照)しかしながら、これまでの活動を通じて内外からは、実際の力以上の期待を掛けられているとも感じております。例えば、1,000名に届こうとする購読者の管理、必然的に増加する事務作業、新聞発送作業はボランティアの領域を越えているともいえます。紙面の充実、コンベンションの充実、地方大会の積極的開催、海外愛好家との

更なる情報交換の活発化、など本来愛好家が掲げるべき理想を計画的に実行するためには、折衝や企画にあたる専従者の確保を視野に入れた発展を目指す必要を感じております。「折紙探偵団」は10年目を迎え、更に理想を目指して発展して行けるかどうかの岐路にさしかかっているといえるでしょう。上記、購読料の値上げは主に「折紙探偵団マガジン」紙面の充実にあて、読者層の拡大に寄与するものをご理解下さい。コンベンションの充実、地方大会の積極的開催など、理想を掲げ、なすべき事を躊躇せず実行するため、今後、一

定規模の資金を確保して行けるかどうかは、さわめて重要な問題です。その意味で、今回新たに「折紙探偵団」の活動規模の拡大にご賛同いただける賛助会員の募集をさせていただきたいと考えております。賛助会員の方には購読料に加え、一口5000円の維持会費を納めていただきますようお願いいたします。賛助会費は、主にコンベンションの事前打ち合わせの旅費やコンベンション会場費などに有効に使わせていただきます。「折紙探偵団」が、将来、数人の専従者を擁する事ができ、更に理想を目指して発展して行くために一定の資金力を確保することの必要性をご理解いただき、多くの方のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

折紙探偵団代表 西川誠司

会計表(第9期の場合)

収入	購読者800人×購読料2,000円
	=1,600,000円
	バックナンバー売り上げ=350,000円
	計1,950,000円
支出	1号印刷代(1,000部)62,000円
	(16~24ページ)×年6回=372,000円
	切手代800人×年6回=858,000円
	封筒代+コピー代+ラベル代など
	=50,000円
	例会費(部屋代)
	=40,000円
	ホームページサーバー賃料年間
	=50,000円
	編集、発送、会員管理など
	おりがみはうす委託費年間=600,000円
	計1,768,000円

折紙探偵団マガジン(旧折紙探偵団新聞)

紙面一新、大增ページ(36ページ)新企画登場

田中具子さん、布施知子さん、
ロバート・J・ラング氏の連載開始!!

田中具子=新・色紙百花、布施知子=奇数角形の箱、ロバート・J・ラング=論文(内容未定)の新連載を始め、お馴染みの執筆陣による折り紙研究ページの充実など、専門誌でありながら、読みやすく親しみのある雑誌になります。さらに折り図も増ページ。情報満載、読者のための雑誌を目指します。

あなたのまわりの身近な情報をお寄せ下さい

講習会、展覧会、出版、作品応募、採し物、仲間採しなどなど、どんな情報でも編集部までお寄せ下さい。誌上で紹介して、折り紙のネットワーク作りのお役に立ちたいと思います。

折紙探偵団 10周年記念 第5回 折紙探偵団コンベンション

吉野一生基金 招待作家募集要項

海外との折り紙交流を目的として設立された「吉野一生基金」には、会員の皆様より多大なご協力を頂いております。今年もこの基金によって、「折紙探偵団コンベンション」に海外作家を招待することになりました。

本年度は10周年記念大会ということで、2名の作家を募集致します。資格・条件は以下に示す通りです。

- 1) 現在、折り紙の創作活動に情熱をもって取り組んでいる個人。
- 2) 第5回折紙探偵団コンベンションの開催が予定されている1999年8月20、21、22日に日本に滞在し、コンベンションに全日参加できるもの。

招待者として選ばれた方には、日本への交通費相当として200,000円を支給します。また、第5回折紙探

偵団コンベンションへの参加費・懇親会費を免除致します。コンベンションでは講師(1~2時間)を担当し、さらにギャラリーおりがみはうすでの自作品展示をしていただくことを義務とします。

応募は、自薦・他薦を受け付けます。希望者は、氏名、年齢、住所、電話番号(ファクス、電子メールアドレス)および簡単なプロフィールを明記し、代表作2~3点を添えて(作品写真、折り図、著作物も可)1999年3月末日までにギャラリーおりがみはうす内吉野一生基金事務局宛に封書で郵送してください。

応募者が複数の場合には、折紙探

コンベンション日程決まる

1999年8月20、21、22日

折紙探偵団10周年記念、第5回「折紙探偵団コンベンション」は8月20、21、22日の三日間の予定となりました。昨年まで利用させていただいた東洋大学が、大学側の事情で今年は利用出来なくなりましたが、本紙「折り紙庵」でお馴染みの岡村昌夫氏のおついでで、東京成徳短期大学(東京・北区)というコンベンションの会場として理想的なところを確保することができました。詳しいことは次回に触れるとして、この喜ばしい決定をお知らせいたします。

また、一生基金招待作家募集要項記事にこの決定事項が必要なために、探偵団新聞が遅れましたことをお詫びいたします。

会場は東京成徳短期大学に

偵団内で組織する選考委員会(岡村昌夫、川崎敏和、川畑文昭、西川誠司、布施知子、前川淳、山口真)で採否を決定します(これまでに折紙交流としての来日経験のない若手作家が優先される可能性があります)。

採用が決定した方への連絡は4月中旬に、また会員への発表は折紙探偵団マガジン2号(6月発行)紙上およびホームページ上にておこないます。

3rd Yoshino Issei Fund Invitation

We Origami Tanteidan will hold the 5th convention this August(20,21,22). We would like to invite two foreign origamists to this convention. We are accepting candidates until the end of this March. We accept both recommendations and direct applications. The selection committee will decide who we invite and announce the conclusion this April on our web site and directly to the winners. The members of the committee are Tomoko Fuse, Fumiaki Kawahata, Toshikazu Kawasaki, Jun Maekawa, Seiji Nishikawa, Masao Okamura,

and Makoto Yamaguchi. The selected guests must attend 5th convention and instruct some models. They must also supervise an exhibition at Gallery Origami House.

Yoshino Issei Fund offers them 200,000 yen for traveling and staying expenses. We exempt them from the admission fee of 5th convention and the social. We also advise on their stay.

Send us your application with the candidate's name, age, address, telephone number, fax number, e-mail address, and some works (photographs of

the model, diagrams, or books).

Yoshino Issei Fund
c/o Gallery Origami House
#216, 1-33-8, Hakusan,
Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0001,
JAPAN

another announcement

We have another announcement. We exempt all foreigners from the admission fee of 5th convention and the social to celebrate our 10th anniversary. We will welcome all of you to our 5th convention.



つまみおり

いよいよ折紙探偵団は10周年を迎えます 見慣れた誌面ともこれでお別れ(?)。次号からは 折紙探偵団マガジン として生まれ変わります 乞うご期待!

第3回TVチャンピオン----- -----神谷哲史君優勝!!

第3回TVチャンピオンが2年半ぶりに復活し、2月18日にお茶の間に届けられた。当初、歴代チャンピオンの出場が考えられたのだが、諸般の事情で出場できなかったのは残念であった。

映像では楽しげに展開されているが、出場者にとっては想像をはるかに超えるハードな戦い。特に第1ラウンド、第2ラウンドは寒風ふきすさむ1月16日、東武動物公園で録画撮影が行われた(折り紙がアウトドアな遊びだったとは知らなかった)。視聴者を意識するあまり、無理な展開が多く、つらい1日だったに違いない。1回戦では優勝候補と目されていた高井氏が脱落する番狂わせ。2回戦では、前夜仕事で徹夜状態であった山田純氏が脱落した。結果、決勝戦に進んだのは島村麗子さん、神谷哲史君、川村みゆきさんの3人。翌日、都内の小さな会場で10時間に及ぶジオラマ制作の決勝戦が行われ、17才の神谷君が3代目チャンピオンに選ばれた。折り紙側の審査員には前川淳、山口真の両氏が出演した。

いやな予感から始まった

去年の探偵団の忘年会で、山口さんが、嬉しそうな顔をして近づいてきました。ムム、いやな予感。なんと、次のTVチャンピオンに、出ないかというのです。今までの勝負を、見てきた人間にとっては「あんなのハードなものにはつき合えない」というのが正直な感想です。どうしても出場者が足りなかった場合の補欠にして下さいと頼んだのですが、翌日TV局から「ご出演ありがとうございます」という電話がかかってきてしまいました。

勝負の舞台は東武動物公園。真冬に屋外で机に座っての作業です。その方が「TVの絵になる」というのですが、折る方は大変です。風が吹いて何度も作品が飛んでいってしまい、拾い集めたりする事に時間がかかってしまったりしました。

第1ラウンド1回戦「折り紙創作勝

負」最初の勝負は、花です。今まで花なんか作ったことは、なかったのですが、何とかでっち上げての参加です。きっと川崎さんの「バラ」でくる人間がいると思ったので、対照的にシンプルなものにしてみました。5枚の折り紙を使った「キク」です。作者としてはなかなか気に入っていたのですが、山口さんからは「高井さん、この勝負捨ててるんじゃない」と言われてしまいました。

次の2回戦は、ポケモンひな祭りです。挑戦者4名とも私と同じように、ポケモンの事をほとんど知らなかったようです。私は、子供のいる友人にメールで、どのキャラクターを使ったらいいかを質問し、本屋で買ってきたゲームの攻略本を参考に作りました。しかしこの勝負で勝利をおさめた人は、20本以上もビデオを観て、ポケモンの世界を知ろうと努力しました。そしてポケモンのキャラクター達が、ひな祭りごっこをしたら、だれが

コマツヒメの
新装版
RETURN 5

名探偵オリン

第54話：紙は見えていた事件



何になるかと考えてひな段を構成しました。その結果が、審査員である子供達の支持につながりました。創作の原点を教えられました。

3回戦の勝負は、折り紙しりとり。全然準備をしていなかったもので、なんと2回目アウト。これじゃあ勝負にならないので、TV局の人にも困ってしまい、出来たことにして、何処かして「る」で終わりになり、私にとっての長〜い1日が終わりました。

高井 弘明

前夜の徹夜が.....

出場が決まったころは、正月に店で配るウサギとピカチュウを主に折っていたが、決まってからは「しりとり」用の5分で折れる作品を練習した。昔の本を引っ張り出し一通り折っていたら、久しぶりに古い友人に再会した感じがした。結果、何とか第1ラウンドは通過したものの、第2ラウンドの連戦では前夜の疲れが残り、半分居眠り状態で不規則な連戦となってしまった。

とにかく、折って折って折り続ける時間が持てたことに感謝しています。

山田 純

不思議な体験

終わってみると、あっという間の出来事でした。ただ、折り紙が好きで参加を希望したので、出場が決まってから、とても焦りました。よく考えると、これといったすごいことをできるわけでもなく、どこから手をつけたらいいのかさっぱりわかりませんでした。要領を得ない私にいろいろと助言してくださり、探偵団の方々には本当にお

世話になりました。ありがとうございました。

今までは人におげるために折ることが多かったのに、野外で人に見られながら折るのは初めてで、不思議な体験でした。慣れるまで緊張して指が動かなかったのが悔しかったです。同じ折り紙でも人によってまったく出来上がりの雰囲気が違うのには驚きました。今回出場させていただいて、やっと自分が折り紙の世界の入り口にたどり着いたことに気がつくわくわくしています。

あのテレビを見て、折り紙をする人がもっと増えてくれるといいなあと思います。

島村麗子

バラエティ向き?

ユニット以外、まるで取り柄のない私が出てもいいような番組なんだろうか?最初の印象はこうでした。収録直前までずっと不安でしたが、いざその場に立ってみると楽しくて、あっという間の2日間でした。最終結果がどうだったかということよりも、自分の作品をいろんな分野の方々に評価していただけたことと、自分自身がどうやらバラエティ向きの人らしいということこそ“再認識”できたことが、最も大きな収穫だったように思います。

貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

川村みゆき

第4回を待つ

第1ラウンド1回戦、謎のホイル紙で水仙を折る。もちろん一枚折り。

クレスリングさんの の展覧会に行って

安西 真

最近、部活が忙しくなってきた、なかなか折り紙と接する機会が少なくなっています。

川崎さんが、探偵団のホームページに書かれた「クレスリングさんの展覧会」の記事を読んで、父が弟と自分を展覧会に連れて行ってくださいました。松屋に着いて7階のギャラリーまで行って驚きました。そこにあったのは今まで見てきた作品とはまるで違っていました。まず目に付いたのは、昆虫の羽の畳方を折り紙で説明してました。まあ、その他いろいろ中学一年生には難しい内容ではありましたが、その斬新な発想は、中学一年生に何かを呼びかけていました。

クレスリングさんはとても親切で、

折ってみたら時間が余ったので、即興で花瓶も作る。審査の結果、予定外に(?)勝ち抜いてしまった。実は勝敗きというのも考えていたのだが、時間的な問題で却下された。2回戦はポケモン、実は準備に一番苦労したのがこれ。幻の作品になってしまったのだが、なんかもったいない様な気がする。

決勝ラウンド、まずメインとなるドラゴンを全力で作る。完成したら残り時間は半分に。後半はやや失速気味になってしまった。出来は……そこそこ。

終わってみると短かったような気

いろいろ説明や、実演をしてくれました。なかでも、筒に紙を巻いて円筒状にし真ん中の方をねじったオブジェを教えてくれたのが印象に残っています。また、クレスリングさんが、おりがみを準備してくれたのでボクは、展示している写真の中の昆虫を作る事にしました。クレスリングさんはその作品を昆虫の標本の横に置いてくれました。

最後にクレスリングさんはフーと吹くとすごい速さでくるくる回るコマをくれました。痛み付きになります。この展覧会を通して、また、折り紙が身近になったと思います。

●パリ在住のビルータ・クレスリング(Biruta Kresling)さんは、ロシア人とドイツ人のハーフで、ウィーンで建築・都市計画を学んだデザイナー。第2回折り紙の科学国際会議にも出席した。

この展覧会「BIONICS-BIRUTA KRESLINGの進化の折り紙」は1/20~2/6に松屋銀座7階デザインギャラリーにて開かれた。

もする。藏れたけど面白かった。新作もずいぶん出来たし……ところで第4回はあるのか?

神谷哲史



▲決勝戦を戦った左から、島村、神谷、川村の三選手

「趣味こそ人生」レポート

小松英夫

前号でお知らせした1月8日放映のNHK教育テレビの番組「趣味こそ人生」はご覧になりましたか?なんだかお伝えした内容とだいぶ違ってしまったようです。一応出演した僕がレポートを書くことになりました。

番組は我々にもお馴染みの松尾貴史の司会進行で、まず趣味のない人たちが自分にあった趣味を探す、といった企画につづいて、スタジオの大画面で

種類別に分類された趣味の情報紹介へ。いよいよ探偵団のデータベースが公開されたと思ったら、北條さんのコメント(少し)と弥勒菩薩、宮島さんの魔女が映し出されて終了、えっ、これだけ?先日の取材時に、山口さんが「こんなに撮ったってどうせ使わないんだから無駄だよ」と言っていたとおりでした。その後、おりがみはうすと中継がつながり宮島さんと僕が登場。テレビ電話と

言いつつ、こちら側に映る映像はテレビ画面と同じ物なので、向こう側の顔は見えないのです。精一杯のアピールを込めて作品を色々と画面前にかざしながら、スタジオと会話。これもあっという間で、「一枚の紙で出来てるんですか」「そうです」とかそんな程度。ある程度予想していたんですけどね。でも、他に出演したサークルのミュージックスーと草笛による競演に比べて……。番組の最後のほうで電話番号を書いた紙がうつりましたが、後日おりがみはうすには15件ほどの問い合わせがあったそうです。そのうち探偵団に入った人も何人かいるようですので、やっぱりテレビはあなどれません。

おりすじ

折り紙と私

島村麗子

気づいた時には、折り紙が好きでした。幼少の頃は、年に一度夏ごろ、田舎の曾祖母の家に、母と共に顔をだしていましたが、ある時、私だけ曾祖母に呼び出されたことがありました。不思議に思いながら、一人で曾祖母の部屋にいったら、部屋の中は、折り紙でいっぱいでした。曾祖母は、「おまえが去年、折り方を教えてくれたから、たくさん折ってみたんだよ。」と私にうれしそうに話しかけてくれましたが、わたしは小さかったので、前年の夏のことはすっかり忘れてしまっていました。その時の気まずい空気を思い出すと、嘘でもいいから、驚いてあげればよかったなあと考えています。

小学校の頃、たまたま笠原さんの「折り紙図形パノラマ」という本を買ってもらってから、折り紙が趣味になりました。ただの紙のはずなのに、折って組み立てると、かっこいい立体になっているのが、わけがわからず、おもしろかったです。その頃母に、将来の夢を尋ねられました。私は

考えた末に、折り紙作家と答えると、笑顔で冷たく反対されました。自分が折り紙が好きなことを、その時初めて自覚しました。

その後は勉強と部活に追われ、気付いたら大人になっていました。

最近やっと、辺りを見渡せるようになったので、「おりがみはうす」を訪ねてみました。偶然西川さんがおられたので、折り紙の創作の仕方を尋ねたところ、「方法はない。」と一喝されました。「適当に折って、それが何となく何かに見えればそれでいい。あともう一回折れないとだめだよ。」とおっしゃられていました。それを聞いたら、なんとなくほっとして、私にも何かができそうな気がしています。

この間、今度は定例会に参加してみたところ、「をる」に登場していた方が勢ぞろいされていたので、びっくりしました。プロ野球ファンの人がプロ野球選手に囲まれた感じです。生きていればいいこともあるんだなあと感じました。

1998年9月記

洋書案内

新刊書ではありませんが、しばらく品切れが続いていたので、入荷お知らせを致します。ただし、数に限りがあります。在庫確認のお問い合わせの上ご注文下さい。

Origami Insects

●ロバート・小ラング著 A-4変形 154ページ Dover刊 定価2,200円 送料380円●アリ、セミ、カブトムシ、バッタ、カマキリやトンボなど21の作品が紹介されています。在庫50部

Origami Sea Life

●ジョン・モンテローラ、ロバート・小ラング共著 A-4変形 192ページ Antroll刊 定価2,400円 送料420円●ヒラメ、カニ、アンコウ、サメ、エンゼルフィッシュや貝など海の生き物の作品が紹介されています。在庫20部

このほか数種類の洋書があります

が、いずれも残部僅少のため、必ず電話で確認して下さい。また複数の場合も送料の確認をお願いします。電話03-5684-6040 おりがみはうす

折紙探偵団定例会のお知らせ

■場所・文京区民センター●2月27日(土)2時～5時30分。例会での講習会は渡辺氏による甲イカ(予定)が2時からあります。●3月27日(土)2時～5時30分。講習会は講師未定

ホームページ公開中

公開URLは、
<http://www.ask.or.jp/origami/v/> です。団員パスワードは、大文字/小文字区別して、Pyramidです。

おりがみはうす

ホームページ公開中

公開URLは、
<http://www.remus.dti.ne.jp/origami/v/>

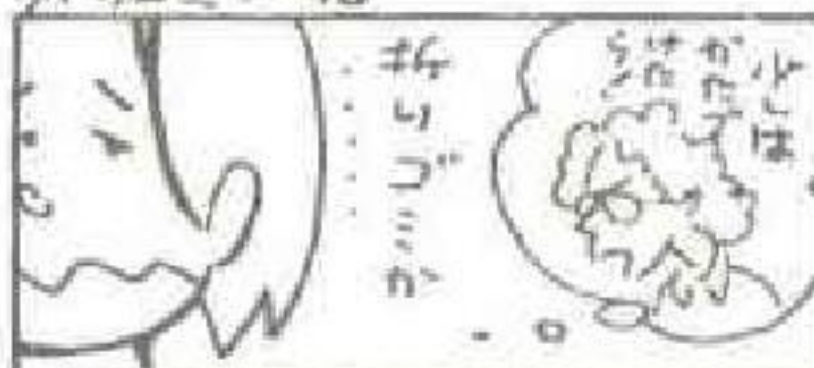


迷探偵

オリオン

作・山梨雄二

折り紙の巻



定価 300円

発行・折紙探偵団

〒113-0001
東京都文京区白山1-33-8-216
ギャラリーおりがみはうす内
Phone (03) 5684-6080
発行人・西川誠司
編集人・山口 真、岡村昌夫